

---

# K - O N ! ~ふわふわ日和~

紅茶花伝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

K・ON！〜ふわふわ日和〜

### 【Nコード】

N69580

### 【作者名】

紅茶花伝

### 【あらすじ】

路上ライブで出会った二人…。そんな二人が繰り広げる純粋な物語…。  
初めて

書く小説です！！純愛系目指して書いて行こうと思います。

なかなか使いなれずにおかしな改行や表現。誤字脱字が有るでしょうが暖かく見守って上げて下さいませ（笑）

## 第一話 出会い！（前書き）

初めて書いた話ですね（笑）楽しんで頂けると幸いです。

## 第一話 出会い！

春休みの晴れた日曜日、僕は愛用しているアコーディックギターを持っていたもの場所に出掛けた。

僕がいつも一人で路上ライブをしている場所はある商店街。水曜日と日曜日の週に二回、ここで自分が作ったオリジナル曲などを演奏している。たまに見えてくれる人が一人や二人いるくらいだったけど今日は少し特別だった。

いつものように歌っていると少し茶髪のショートヘアの女の子が買い物袋を持ってこちらを見ていた。

見ていたというよりは聞き入っていたと言う方があいかもしれない。彼女は目をキラキラさせながら見入っていた。女の子に見られるのは恥ずかしかったけど悪い気はしないので続けていた。演奏が終わるとその女の子が近づいてきた。

「あ、あのっ！」

「はっ、はい！」

「その子の名前、なんていうの？」

最初は少し意味がわからなかった。彼女は何を言っているのだろうか？

「その子って？」

「君が使っているアコーディックギターだよ！もしかして名前なの？」

ギターの名前なんて考えたこともなかった。返答に困っていると彼女はいった。

「じゃあアコースティックギターだからアッコちゃんだね！うちのギター也太も可愛いんだあ…」

ギー太とは彼女のギターの名前だろうか？なかなか凄いネーミングセンスの持ち主かもしれない。

「少しギター貸してくれない？」

上目遣いは反則だと思います。

「あ、ああ いいよ。」

「思ったより軽いんだね。」

そついうと彼女はいきなり僕がさっきまで弾いてた曲を弾き初めた。そのことに僕はかなり驚かされた。なぜならこの曲は僕が今日路上で初めて弾いた曲だったからだ。

「相対音感！？」

「相対音感？なにそれ？」

「いや…、何でもないよ…。」

「？」

彼女は自分の才能に気が付いていないのだろうか？

「そついえば君はなんて名前？私は平沢唯って言っただよ！」

「平沢さんね。僕は絹谷直哉って言うんだ。よろしくね。」

「絹谷くんだね！よろしく！」

それから三十分ほど僕らは音楽について話していたら平沢さんの携帯がなった

「あ、憂？ゴメーン！お使い忘れてた！」

平沢さんはそういうと

「お使いだから帰らなきゃ。絹谷くんまた路上ライブ聞かせてね。バイバイ。」

と言うと走って帰ってしまった。

よく考えるとこんなふうに女の子と話したのは初めてだなと思った。りなかなか可愛い子だったなと少し嬉しくなった。

僕もギターをケースにしまいその場を後にした。

## 第一話 出会い！（後書き）

誤字脱字のご指摘、ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第二話 それぞれの第一印象（前書き）

早くも第二話を投入。

空いてる時間に書いていきます。

## 第二話 それぞれの第一印象

く絹谷宅にてく

「ただいま。」

「お帰りなさいく。」

いつも道理の母と子の挨拶だ。ちなみにうちは父と母と僕の三人家族だ。

「くご飯出来てるわよ。」

そう言われて僕はいつもどつりに席についてご飯を食べる。風呂に入り終わり寝るときに今日初めて会った平沢さんのことを思い出していた。変わった女の子だったけど可愛かったな…。また会えたらいいな…。そんなことを考えてるうちにいつのまにか眠ってしまった。

く平沢宅にてく

「憂く、ただいまく。ゴメン。」

「お姉ちゃん遅いよく。」

絹谷くんと話しているうちに結構時間が経ってしまい私は憂に怒られてしまった。

「お姉ちゃん、今日はカレーだよ!」

「やった〜！。マシユマロ入れた？」

「お姉ちゃん…。いれるわけないよ。」

「え〜。」

そんな他愛もない会話が続く。

「今日はね、絹谷くんって人とお友達になったんだよ！。絹谷くんのギターのアッコちゃん可愛かった〜。」

「絹谷くんって男の人？」

「うん。ギターが上手でとってもかっこいいんだ〜。」

「私も会ってみたいな〜。」

「今度は憂も一緒絹谷くんの路上ライブ見に行こうよ！」

「でも絹谷さんていつ路上ライブやってるの？」

「あ…。」

すっかり聞き忘れていた。仕方ないので来週の同じ時間にまたあの場所へ行ってみよう。そしたらまた会えるかも。

憂と話したりお風呂に入っているうちに寝る時間になってしまった。寝る前にギー太を少し弾く。

「ギー太、今日はね、絹谷くんっていう人とお友達になったんだよ。アッコちゃんっていう絹谷くんのギターとっても可愛かったなあ〜。あ、でもギー太も可愛いよ！」

そんなことをギー太に話しているうちに夜は過ぎていった…。

## 第二話 それぞれの第一印象（後書き）

誤字脱字の指摘、ご意見ご感想お待ちしております。

### 第三話 それぞれの学校生活（前書き）

第三話です。

### 第三話 それぞれの学校生活

〔松山高校〕

僕の通う松山高校は男子校なので異性に飢えているやつらはとても多い。

故に近くにある桜ヶ丘女子高校の名前が話題にすることも少なくない。

「おい、直哉！」

今僕の名前を読んだのは松江彰。まつえあきら 小学校の頃から一緒に親友であり悪友でもある幼なじみで、サッカー部に所属しているイケメンだ。しかしかなりの変態であるため今まで女子にモテた試しはない。

「何だ、彰？」

「昨日路上ライブをしているお前を見かけたんだが一緒に話していた桜ヶ丘の子は誰だ？」

見られてしまっていたのは予想外だったが別にやましいことはしていないので正直に答える。

「ああ、平沢さん？別にギターやってるらしいからたまたま話が弾んだだけだよ。」

「ほう……。で何年生なんだ？」

「聞いてねえよ。」

「んじゃあケーバンは聞いたのか？」

「初めて会った女の子に聞けるわけないだろ！でもまた路上ライブ聞きにきてくれるらしいよ。」

「そんな曖昧なこと信じられないだろ。」

確かにそうだ。自分でも惜しいことをしたと思えてきた。

「いいか、次に会ったら必ず学年とケーバンを聞くんだ。そして俺に紹介してくれ！」

「結局それかよ！」

とりあえず彰を一発殴ったあと僕は別れを告げて家に帰った。

く桜ヶ丘高校く

いつも道理の放課後、そこにはお茶会をする放課後ティータイムの姿があった。

「この前一目惚れしちゃったんだ。」

「「えっ!?!」」

「おい、漑。ど、ど、ど、どうするよ!?!ゆ、ゆ、ゆ、唯が一目惚れだど!?!」

「と、とりあえず落ち着け!もしかして勘違いかも知れないだろ!」

「そ、そうですよ!それに唯先輩は天然ですよ?」

「可愛いんだあ。アッコちゃんっていうギターなんだよ。」

「「はい!？」」

「唯が一目惚れしたのってギターだったのかよ!」

「そっだよりっちゃん？」

「と、とりあえず桜ヶ丘軽音部は恋愛禁止だからな!」

「おゝさすがりっちゃん!」

「そろそろ練習始めないか？」

「そうですよ! 零先輩の言う通りです!」

「よしじゃ練習するか!」

「「おー!」」

「こうして本日のお茶会はお開きになった。

#### 第四話 お詫びとケーキと勘違い（前編）（前書き）

こっさり更新します。

#### 第四話 お詫びとケーキと勘違い（前編）

く桜ヶ丘軽音部く

「ふう。このくらいにしておくか。」

「そうですね、澪先輩。」

「おわったあ。」

「お疲れ様。」

「よしみんな！帰りにケーキ食べに行こうぜ！」

「賛成！」

そついうとみんなは片付け始めた私もギターを自分のケースにしま  
う。

帰り道は夕焼けが綺麗だった。

「そついえば唯先輩が話してた絹谷さんってどんな人なんですかね  
？」

「べつに、ギターに惚れたただけだから特に大丈夫でしょ？」

「まあ唯は天然だしな。」

「あずにゃん。何話してるの？」

「唯先輩には関係ないです！それに抱きつかないでください！」

「えゝ。あずにゃんのけちゝ。」

「ほらほら、もうすぐ着くぞ。」

軽音部の5人が喫茶店に入る。

「わーい！ケーキ、ケーキ！」

「はしゃぎ過ぎですよ唯先輩！」

「はぁーい。」

「みんな何にする？」

「チーズケーキで！」

「私はショートケーキかしら？」

「んじゃあ私はショコラで。」

「私はモンブランがいいです。」

「じゃあショートとチーズとモンブランが一つとショコラが二つだな。飲み物は紅茶でいいな。」

しばらくするとケーキが運ばれてくる。

「ねえ？あれ憂ちゃんじゃないかしら？」

「あ、本当だ…。」

「ちょっと待て。一瞬にいるの男じゃないか!？」

「え!？」

「本当ですね…。」

「まさか彼氏!？」

「お、落ち着け!」

「絹谷君だ…。」

「知ってるのか?唯？」

「うん…。路上ライブやってた人だよ…。」

「まさか平沢姉妹を付け狙うストーカーじゃ!？」

「まだそうと決まったわけじゃ…。それに憂と親しそうですし。」

「ヤバイ、こつちみた!」

バツとみんなはメニューを見始める。

「とりあえずどうする?」

「もしかして彼氏かもしれない。」

「そんなあゝ。」

「あ、憂ちゃん来たぞ。」

～続く～

**第五話 お詫びとケーキと勘違い（後編）（前書き）**

夜にこっそり更新します。

## 第五話 お詫びとケーキと勘違い（後編）

（帰り道）

「6時か…。」

僕はそう呟き帰り道を早歩きで歩いていたらときだった。いきなり誰かが胸元にあたった。

「いったあ…。」

「す、すいません！って、平沢さん？」

髪型が前会った時と違いポニーテールだがこの顔は間違いない。

「あ、ごめん。」

そう言っただけ僕が手を差し伸べると平沢さんは手を掴んで立ち上がった。

「すいません…。」

「いやこっちも少し急いでたから。」

「あの…。失礼ですがどちら様ですか？」

そう言われると少し傷つく。

「覚えてないかも知れないけど路上ライブやってた絹谷だよ…。」

「路上ライブ…?」

そう言って彼女は少し考えると急に閃いた(?)顔になった。

「もしかして、その人ショートボブで前髪をピンで留めてませんでしたか?」

「うん。ギー太がどうのこうの言ってたけど…。あれ?平沢唯さんじゃない君はの?」

「その人間違いなくお姉ちゃんです。私は平沢唯の妹の平沢憂と言います。」

そういえば電話で憂が呼んでるって言って帰っていったな…。この子か…。

「あ、卵が…。」

「ご、ごめん!弁償するから!」

「いえ、大丈夫ですよ。2、3個割れただけみたいですから…。」

「でも、悪いし…」

僕がそう言ったら平沢憂さんは少し考えて言った。

「じゃあこの近くに美味しいケーキが有るんです。一緒にしませんか?」

バイト代が入った直後なのでケーキ位の出費は全然痛くない。

「あ、じゃあ…。」

こうして平沢さんの妹の平沢憂と知り合った。

〈喫茶店〉

「このケーキ美味しいんですよ！」

平沢憂さんは少しはしゃいでいる。姉に比べかなりしっかりしているように感じるがケーキではしゃぐのはやっぱり女の子と言ったことなのだろう。

「あ、じゃあチーズケーキとコーヒーを…。」

「私はストレートティーとショコラで。」

そういえばまだ名乗ってなかったな、と思っていたと

「たしか絹谷さんですよね…?」

「えっと…、平沢さんは。」

「憂でいいですよ。平沢じゃお姉ちゃんと区別しにくいですから。」

「じゃあ憂さんは?」

「別にそんな畏まらなくても。」

「じゃあ、憂ちゃんはどこで僕のことを?」

「お姉ちゃんから少し聞きました。」

そう言って憂ちゃんは少し笑った。

「路上ライブをしてるとっても上手な人が居てとっても可愛いギター持ってたって言っていました。」

「へえ。」

女の子に褒められてるのは悪い気はしない。ギターって言うのが少し気になるけど…。

「お姉さんもギターやってるの?」

「はい。桜ヶ丘の軽音部ですよ。」

「道理でうまいはずだよ。」

それから少し話をしているとヒソヒソ話している五人組が目に入っ  
た。

「あ、あれ平沢さんじゃない?」

五人と目が合うと一斉にメニューを見始めた。怪しすぎる…。

「あ、本当ですね。向こうに移動しましょう!」

「あ、ちょっと!」

そう言う頃には憂ちゃんは向こうにいつてしまっていた。仕方ないので移動する。

「や、やあ、憂奇遇だね!」

カチューシャで前髪を止めた子が言った。

「デ、デートか?」

とロングで姬カットの子がいう。

平沢さんは

「憂。私じゃ満足出来ないの?」

と涙目に。

眉毛が太い子は落ち着いていたがツインテールのちびっこにさっきから睨まれている。

「大丈夫だよ。私はお姉ちゃん一筋だからね。」

と憂ちゃんは平沢さんを慰めている。少し心が痛いのは何でだろう  
...?

「えっと...。僕は絹谷直哉って言います。憂ちゃんとはさっきいろいろあつて...。」

とりあえず事情を説明したらみんな分かってくれた。ツインのちびっこ以外は。

「なんだ！そういうことか！私は田井中律！」

とカチューシャの子から自己紹介が始まった。

「私は秋本漑。よろしく。」

とロングの姫カットの子。

「琴吹紬です。よろしくお願いします。」

と眉毛の太い子がいう。礼儀正しい…。

「平沢唯だよ！久しぶりだね！」

平沢さんが言った。

「中野梓…。」

生意気なちびっこが言う。

「よろしくね。みんなはクラスメイトかなんか？」

「楽器持つてんの見て分らないんですか？」

本当に生意気だな…。

「梓！ごめんね。私たちは桜ヶ丘の軽音部なんだ。」

秋本さんはしっかりしている。まとめ役なのだろう。

「君たちが桜ヶ丘の軽音部なんだ。」

「そついえば絹谷もギターやってるらしいじゃん！」

「まだ下手だけどね。」

こんな話をしているとすでに7時前になっていた。

「ヤバっ！みんなそろそろ帰るぞ！」

田井中さんがそう言うことで解散と言うことになった。

帰り道はたまたま平沢姉妹と一緒にだった。

「絹谷君は最近路上ライブしてないね…。」

「ごめん。少し忙しくて。またすぐに始めるよ。」

「楽しみにしてるよ！あ、私たちここ右なんだ！絹谷君はどこ？」

「僕は左だよ。じゃあね。」

「バイバイ！」

「さようなら。ケーキありがとうございました！」

そう言って平沢姉妹と別れるて少ししたら憂ちゃんが追いかけてきた。

「直哉さんに連絡先聞こうと思ってたら忘れていました。」

と息切れをお越ししながら憂ちゃんは言った。

「あ、分かった。」

僕は戸惑いながらも携帯のアドレスを憂ちゃんと交換した。

「ありがとうございます！さようなら！」

「じゃあね。」

女の子にアドレスを聞かれたのは久しぶりだな…。今日はいいい日だ…。そう考えるうちに僕は家に帰りついた。

## 第六話 会議！（前書き）

早めに更新。短めです。

## 第六話 会議！

（桜ヶ丘軽音部部室）

「よし、みんな揃ったな！ムギ、唯は本当に遅れるんだな？」

「ええ。唯ちゃんは今日掃除当番だから間違いないわ。」

「よし、今日諸君に集まって貰ったのは他でもない！昨日の怪しい男。絹谷直哉についてだ。諸君の意見を聞きたい。」

「私は別に構わないと思うが…。」

「私もお友達でしたら構わないかと。」

ムギが友達を強調して言う。

「私は反対です！松山高校の男は女の子にだらしがなくてしつこいから気を付けろって中学生のころから言われてましたから！」

「でもそんなに悪いやつには見えなかったぞ。」

「零先輩は少し甘過ぎます！唯先輩のためでもあるんですよ！」

「梓、とりあえず落ち着け。」

「律先輩まで！」

「まあとりあえず梓ちゃんの言う通り用心だけはして起きましよう

「？」

「そうだな。もしものことがあるかもしれないしな…。」

「んじゃ、みんな絹谷に気を付けるように！会議終了！」

「そうね。そろそろ唯ちゃん来る頃だし…。」

「みんなお待たせ！」

「お、唯来たか！んじゃ練習始めるぞ！」

「えゝ。先にケーキ…。」

「んじゃもう少ししてからか…。」

「わーい！」

「そうだ、唯。絹谷のことなんだけど…。」

「絹谷君がどうしたの？」

「一応気を付けろよ、男は狼だからな。」

「そ、そうだね！」

「んじゃそろそろ練習始めるぞ！」

「「おー！」」

第七話 ドキドキ!?!合コン!?!(前書き)

繋ぎなので短めです。

## 第七話 ドキドキ！？合コン！？

〔松山高校〕

「合コン？」

「そうだ、結構可愛い子が来る！」

「だるい。」

「頼む。後一人必要なんだ。」

「他当たれ。」

「誰もいないんだよ。」

「仕方ないな……。んで何人くるの？」

「3対3の6人。しかも3人とも桜ヶ丘だぞ！そして場所はこの有名なマジカルランドだ。」

「うわ、入場料どうすんだよ！？」

「安心しろ。準備してある。」

「ああ、ならいいや。」

彰はなんか金持ちだから気にしないでおうつ。

「んで、いつだ？」

「ああ、明日の10時に駅に集合だ！」

「はやっ！」

「でもどうせ暇だろ。」

「まあ暇だが…。」

全く面倒なことを引き受けてしまった。相手は桜ヶ丘か…。一体誰が来るんだろうな…。まさか軽音部か？

「で、後一人男は誰だ？」

「ああ、あと一人は祐希だ。」

定基祐希隣さだもとゆうきのクラスのイケメンでこいつと同じサッカー部。たしか去年のクラスが一緒だったな。

「あ、あいつか。」

「そう言うことだ。んじゃまた明日な。」

本当に面倒なことを引き受けてしまった…。

く続くく

## 第八話 遊園地！（直哉編）（前書き）

お気に入りが10人を突破し感想をすでに2名の方が書いて下さいました。嬉しい限りです。本当にありがとうございます！！

## 第八話 遊園地！（直哉編）

くく 駅前

「ヤバい！遅れる！」

ついに日曜日が来てしまった。とりあえず駅に行くために走っている。なぜかって？寝坊したんだよ！

「はあはあ…。間に合ったか…？」

「おい！遅いぞ！」

声がするほうを見ると彰と祐希、他に三人女の子が来てた。視線が痛い。

「すみません！遅れました！」

「ほら、さっさ行くぞ。」

電車の中は意外と混んでおり女の子3人を座らせて男3人が前に立つ形になった。

「んでさー。」

「本当に？」

みんな話しをしているが輪に入りづらい…。

「ねえねえ。絹谷君。」

「ん？」

いきなり話しかけられて少し驚いたが普通に返す。えーとたしかこの人は草薙楓さんだっけ？少しギョルっぽい気がする。

「絹谷は何か特技とかないの？」

「特技ねえ…。」

「こいつギターめっちゃ上手いよさ。」

「おい！彰！」

「照れんなって！」

「へえ、凄いじゃん！」

なんか誉められたらしい。

「お、あれじゃね？」

窓の外になかなか大きな遊園地が見える。あれがマジカルランドか…。

駅に着くとすぐに園内への入り口が見えてくる。

「あー。意外とでかいな。」

「なんだ直哉。初めてか？」

「ああ、初めてだ。」

入場券を係員に渡し園内に入場する。入場したらすぐにネズミ的なマスコットキャラがくる。

「あ、マッキー来たよ！写真撮らない？」

草薙さんの提案でみんなキャラクターと写真を撮っている。しかしみんなよくはしゃげるもんだと感心する。

「次あれ乗ろうぜ！」

彰がいう。こいつはすっかり前橋さん（合コンメンバーの一人）と出来ていた。後の二人は祐希狙いか…。人気のジェットコースターに乗ったりしているうちに彰がどこからかクジを取り出した。いつ用意したんだ…。

「今から男女で二人行動にしようぜ！」

「ああ。」

クジで祐希が中山さん（合コンメンバーの一人）。彰が前橋さん、僕が草薙さんになった。明らかにイカサマだろうし草薙さんは凄い不満そうである。

「んじゃ3時に集合な！」

祐希がそついうと各自バラバラに散っていった。

「とりあえずなんか食いませんか？」

時間ももう1時を過ぎていたしね。腹も減ったしね。

「あそこにスタンドあるよ！」

「じゃ行きますか。」

スタンドで僕はホットドッグを草薙さんはアイスを買っていた。しかし物価が高い。何が夢の国だ…。

「ほら絹谷君。あーん。」

「そういつて口に入れる直前で自分で食べるんじゃないんですか？」

「あ？バレた？」

「やっぱり…。」

「騙されるかと思ったのに…。」

「はは。まさか。で、このあとどうします？」

「少し疲れたしこうやっていたいかな？」

「わかりました。」

こうは言ったものの二人きりだと話す話題がない。

「そういえば草薙さん祐希のやつ狙ってませんでしたか？」

「あ、分かった？」

「やっぱり。」

「そういえば絹谷はなんでこの合コン来たの？あんまりガツついてないし。」

「数合わせですよ。」

「大変だね〜。」

話が終わってしまった…。なんかこんな状況はとても苦手だ…。

「トイレいつて来ます。」

「絹谷、ちょっとデリカシーないよ。」

そう言つて草薙さんに手でシッシツとされた。まあ僕自身この状況から逃げたかっただけだが。

携帯で時計を見るともうすぐ3時を示そうとしていた。

（少し急ぐか…。）

そう思いながらトイレから出るとあの生意気なツインテールのちびっこに出会った…。

一瞬の刹那、このちびっこツインテールが放った言葉は僕にとって衝撃的なものだった。

（続く）

## 第八話 遊園地！（直哉編）（後書き）

まだまだ遊園地編は続く予定です。

第九話 GO!GO!遊園地! (前書き)

また繋ぎなので短いです。

## 第九話 GO!GO!遊園地!

く桜ヶ丘軽音部く

「マジカルランド?」

「ええ。お父さんの会社がキャンペーン始めたの。その中の景品でマジカルランドの招待券があったんだけど、お願いして少し余分に取って貰ったの。」

「ほお、ムギ。褒めて使わす。」

「ふふふ。褒められちゃった。」

「律、偉そうだぞ。」

「まあまあ澪ちゃん。」

「でね、6枚あるから私とりっちゃんと唯ちゃんと澪ちゃんと梓ちゃんです枚あるけどあと一人誰を呼ぶ?」

「憂ちゃんはどうだ?去年の大晦日にお世話になったから。」

「私も憂ちゃんがいいと思うね。」

「じゃあ唯ちゃんが憂ちゃんに伝えてくれる?」

「あゝ。ムギ先輩。いつ行くんですか?」

「それがね、このチケット今週の日曜日にしか使えないの…。」

「ああ大丈夫じゃね？用事ある人？」

シーン…。

「ほら、誰もいないし。」

「じゃあ今週の日曜日みんな空けといてね。」

「分かった。」

「楽しみだな！」

「だね、澪ちゃん！」

く平沢家く

「憂く。ご飯なに？」

「今日はカレーだよ！」

「わーい！カレー、カレー！」

「今準備するね。」

「そういえば今週の日曜日にムギちゃんが軽音部のみんなと一緒にマジカルランドに行くことになったんだけど憂も行こうよ！」

「え？行きたいけど入場券とかは…？」

「六枚無料で手に入ったらしいよ。軽音部は5人だから残り一枚は憂の分だってみんなが言ってたよ。」

「そうなんだ。じゃあ一緒にしようかな？明日皆さんにお礼しないとね！」

「そうだね！」

～ 続く ～

第十話 遊園地！（桜ヶ丘軽音部編）（前書き）

更新します。

## 第十話 遊園地！（桜ヶ丘軽音部編）

くゝ駅

「おい。みんな待った？」

「あ、おはよう。りっちゃん、漣ちゃん。」

「おはようございます。」

「今日は唯、遅刻しないんだな。」

「うん！憂が起こしてくれたからね！」

（（出来た妹だ…））

「梓は？」

「あずにゃんはさっきメールでもう少ししたら来るって言ってたよ。  
ムギちゃんは？」

「ムギは途中から同じ列車に乗るってさ。」

「あ、あずにゃん来たよ！」

「すみません！遅れました。」

「おはようあずにゃん。」

「おはよう梓ちゃん。」

「おはよう梓。」

「あれー？もしかして昨日楽しみで眠れなかったとか…？」

「ち、違います！」

「ほう、凄い慌てようだね。」

「うう。」

「律。梓を弄るのはそれくらいにして行くぞ。そろそろ列車出るしな。」

「そうだな。んじゃレッツゴー！」

「列車の中」

「りっちゃん、ムギちゃんってどこで乗るんだっけ？」

「たしか、この駅だった気がする…。」

「あ、あれムギじゃないか？」

「おい。ムギちゃん。こっちこっち！」

「あ、皆さん。おはようございます。」

「おー。ムギ、おはようー！」

「私、みんなと遊園地行くのが夢だったんです!」

「お、そろそろつくよ!」

「オッシャー!楽しむぞー!」

くマジカルランドく

「おお!あずにゃん!憂!マツキーだ!マツキーマウスがいるよ!写真、写真!」

「待つて下さい唯先輩!」

「待つてよお姉ちゃん!」

「なかなか可愛いな...」

「そうですね。」

「オッシャー!んじゃまずはお化け屋敷行ってみよう!」

「嫌だ!」

「行こうよ、澪ちゃん!」

「うう...」

くお化け屋敷く

うがー(得体の知れない着ぐるみの鳴き声。)

「ヒイイイイイイ!」

「お、落ち着け、澪。」

「漣ちゃん、大丈夫よ作り物だから。」

「だってだって…。」

「お姉ちゃん、漣さん怖いのが苦手なんだね…。」

「うん、痛い話も苦手なんだよ。」

「い、意外ですね。」

「怖くない怖くない…。」

「そ、そろそろ出口だな。」

「次は何に乗る?」

「次はジェットコースターに乗ろうぜ!」

「え? 私は絶叫系はちょっと…。」

「ほら、行くぞみんな!」

その後、一回目で漣とムギが、二回目で憂と梓、三回目で律と唯が  
ギブアップした。

「さ、さすがに三回はきついな唯…。」

「そうだね、りっちゃん…。」

「大丈夫お姉ちゃん?」

「えへへ、なんとかね。」

「怖くない…怖くない…。」

「大丈夫ですか？ 澪先輩。」

「じゃあもっ回いくか！」

「嫌だ！」

「仕方ないな…。じゃあコーヒカップでいいか？」

「それなら…。」

「コーヒカップ」

「と、止めてくれ！」

「あははは、意外に早く回るんだね！」

「やりすぎですよ、律先輩…。」

「うふふ。楽しいわあ。」

「い、意外にムギさんが強いですね…。」

「も、もうだめ…。」

「~~~~~」

「いやー。コーヒカップって意外と回るんだな！」

「も、もう乗らない…。」

「澪ちゃん、大丈夫？」

「じゃあそろそろ昼にしようか！」

「疲れたしねえ…。」

「あの、トイレに行つて来て良いですか？」

「ああ、じゃあ梓一緒に行こうか。」

「トイレ」

「律先輩、先に出てますね！」

「あいよ。ちょっと髪乱れたから少し直してから行くわ。」

「~~~~~」

「ふう、急いで戻らないとな…。草薙さん待たせてる…。」

「あ、あなたは！」

「ん？えっと、たしか…、中野さんだっけ？」

（なんで一人でこんなところに？まさか平沢姉妹を付け狙うストーカー！？）

「り、律先輩！早く来て下さい！」

「ん？どうした、梓？つてお前は絹谷！？まさか…平沢姉妹のスト

「カー!？」

「え? 違う...。」

「ちよつと来い!」

「な、なんでだあ...。」

「続く」

## 第十一話 亀裂（前書き）

やっとこさ遊園地編終わりです。疲れました…。

## 第十一話 亀裂

（遊園地）

皆さん、僕はいまマジカルランドのレストランの角の席で6人の女の子に囲まれて尋問を受けています…。

「何でお前は一人でマジカルランドにいるんだ？」

「だから友達と…。」

何でこうなったかと言うととりあえず中野さんに勘違いされて田井中さんに絡まれている間に中野さんが呼んできた琴吹さんと秋本さんとの四人で抑えられて連れてこられた。男とも言えど四人がかりでは勝てるわけもなくこうして尋問を受けている。

「嘘です！だったら何で一人だったんですか！」

「確かに怪しいですね…。友達と来たっていうのも証拠無しじゃ無理があるんじゃないでしょうか？」

「しょ、証拠って…。」

「あの…、皆さん…。さすがに決めつけ過ぎじゃ…。」

憂ちゃんがフォローしてくれるがすぐに反論される。

「ダメだよ憂！ストーカーに甘くしたら！」

「あ、梓ちゃん…。」

平沢さんはさつきから悲しそうにして少しおどおどしている。秋本さんは一応連れて来たが本当にストーカーかどうか決めかねているようだ。

「絹谷くんは本当に友達と来たのか？」

「そうだよ…。」

「だけど私達ももしものことを考えたらこうしないといけないんだ。」

確かにそれはわかる。平沢さんは美人だしストーカーがいると言われたら大抵の人は信じるだろう。が、それだと今回は僕が困る。

「だから本当にストーカーじゃないんだって！」

「だったら証拠を見せて見ろよ！」

「どうしますか律先輩？警察に突きだし…。」

「みんな、もう止めてよ…。」

今まで何も言わなかった平沢さんが口を開いた。

「唯…。」

「絹谷くんは何も悪くないよ…。」

そう言った平沢さんは…、泣いていた。  
多分、自分のせいで責められている僕を見て優しい彼女は申し訳ない気持ちになったのだろう。

「唯…。」

「唯ちゃん…。」

「お姉ちゃん…。」

「唯先輩…。でもやつぱり！」

「直哉！探したぞ！」

険悪な雰囲気の中、そこに現れたのは彰だった。

「あ、彰。」

「お前…。三時集合って言ったじゃん。かれこれ一時間たったぞ…。メール入れても返信来ないし…。」

「ごめん。そういえば祐希や草薙さん達は？」

「三時十分ぐらいに俺が前橋と喧嘩してさ…。先に女の子全員帰っちゃった。祐希は外で待ってる。お前どうやら取り入ってるみたいだから先に外で待っとくわ。」

彰はそう言つと外に出ていってしまった。しかしまあ、なにはともあれこれで僕の無実は証明されたわけだ。

「ごめん…。」

「ごめんなさい…。」

「すまない…。」

「…。すいませんでした…。」

桜ヶ丘軽音部のみんなが口々に僕に謝る。端から見れば悪者は僕だろつ。

「絹谷くん…。ごめんね…。本当にごめんね…。私のせいだね…。」

平沢さんに何て声をかけたらいいのかわからない。

「ああ。まあ、誤解が解けてよかったよ…。あの、そろそろ行くね。外で彰が待ってるしさ…。」

そついうと僕は逃げるように外に出た。こうして今週の休日には疲れと直接ではないにしろ平沢さんを泣かせてしまった罪悪感が残った。少し心が痛かった。

（続く）

## 第十一話 亀裂（後書き）

今回は修羅場を入れてみました。まだ少し甘かったですかね？  
感想等お待ちしております。

## 第十二話 悩みと決意（前書き）

最近暇すぎていつも小説書いている紅茶花伝です。  
とりあえず投稿します。

## 第十二話 悩みと決意

〔桜ヶ丘軽音部〕

月曜日になった。私はいつものように部室にいた。いつもはみんなで楽しい話をしながらお茶をしているが今日の話は少し重かった。

「なあ唯。絹谷から憂ちゃんに返信きたか？」

「ううん。まだ来てない。」

「そうか…。」

「悪いことしちゃったね…。」

「そうね…。」

みんなの空気が重い。それぞれ責任を感じているのだろう。

「あ、私、今日用事があったからみんなまた明日ね。バイバイ。」

「おう。また明日。」

「唯先輩、さようなら。」

「またな。」

「バイバイ、唯ちゃん。」

用事があると言ったのは嘘だ。ただ今は少し気分を落ち着けたかった。

「帰り道」

私は珍しく一人で歩いていた。こうやって一人で帰るのは久しぶりである。しばらく歩いていると後ろから声がした。

「あら、唯じゃない。一人？」

「あ、和ちゃん。」

「どうしたの？今日は元気ないわね。部活は？」

「えへへ、何でもないよ。今日は早く帰ってたんだ。」

「唯、ちょっと喫茶店寄っていきましょ。」

「え？今日はちょっとお金ない…。」

「私の奢りよ。ほら早く。」

「あ、うん。」

「喫茶店」

私は和ちゃんに連れられていつもの喫茶店に来ていた。ここは憂と絹谷くんが一緒にいた喫茶店でもある。

「ほら、唯は何にする？」

「あ、じゃあストレートティー…。」

「わかった。すみません。ストレートティー2つ。」

しばらくするとストレートティーが来た。和ちゃんは少しストレートティーを飲むと口を開いた。

「ねえ唯。今日はどうしたの？」

「何でもないよ…。」

「唯は嘘が下手ね。幼稚園からの付き合いなんだから私がわからないでしょ。」

和ちゃんはすべてお見通しみたいだった。私は観念して話始めた。もしかしたら私も話たかったのかもしれない。

「昨日ね、お友達に酷いことしちゃったんだ…。」

それから私は和ちゃんに全部話した。絹谷くんのこと。昨日遊園地に行ったこと。そしてそこで絹谷くんに酷いことをしちゃったこと…。

「それは、やっぱり軽音部のみんなが悪いわね。」

「うん…。」

「でも大丈夫よ。決してみんなに悪気があったわけじゃないから、きちんと謝ったら彼も必ず許してくれるわ。だから次に会ったら必ず謝りなさいね。」

「うん、そうだよな。ありがとう和ちゃん。」

「じゃあそろそろ帰りましょうか。もうこんな時間だわ。」

久しぶりに和ちゃんと一緒に帰った。和ちゃんに話してだいぶ楽になった。

く桜ヶ丘高校く

「さわちゃん！何も言わずに私に学校の」

## 第十二話 悩みと決意（後書き）

久々に唯視点で書きました。次回はたくさん新キャラ出そうと思つてます！

## 第十三話 悩みと戸惑い（前書き）

感想を書いて下さった皆様本当にありがとうございます！  
それではどうぞ！

### 第十三話 悩みと戸惑い

僕は遊園地で起こったあの一件以来路上ライブを自粛していた。なぜならまた平沢さんに会ってしまつ、そんな気がしたからだ。憂ちゃんのメールも返す気になれなかった。音楽を止めたいとさえ思った。しかしそれでも街で音楽を聴くとギターを引きたくなった。そんな時に僕に出会いがあった。

「松山高校」

「直哉、お客さんが来てるぞ！」

「誰？」

「なんと、あの赤坂さんだ！」

赤坂さんの本名は赤坂和馬、あかさかかずま松山高校の軽音部部长でギターをやっている。身長が185センチあり筋肉質でかなり見た目が怖い先輩だ。

「お前、なんかしたのか？」

「そ、そんなわけないだろ！」

「君が絹谷直哉君か：？」

「はい！？そうです！」

「そんなにかしこまらなくていい。早速だが君の力を借りたい。」

「あの…。どういうことでしょう?」

「ああ、すまん。だいぶ前に君の演奏を路上で聴いてから君に興味が沸いてな。良ければいまから軽音部にこないか?」

「あ、あの…。」

「そうか。では行くぞ!」

こうして僕は少し無理矢理に部室に連れていかれた。

「おい!連れて来たぞ!」

「お、お帰り和馬。」

「紹介しよう!絹谷くんだ!」

「あ、どうも絹谷直哉です。パートはギターをしています。」

「ああ、僕は三年の龍崎雅りゅうさき まさし、副部長でドラムをやってる。よろしくね。」

なかなか優しそうなヒトだ。多分しっかりものだな。

「俺は二年の速水大和はやみず だいまし、パートはベース。よろしくッス。」

こいつは短髪でとても爽やかなやつだ。凄いモテそう。口調が少しふざけているが…。

「二年、速水武蔵はやみず ぶさむらじ…。キーボードをやっている…。大和の双子の弟だ…。」

こいつは暗そうなやつだ。しかしよく見ると髪型が長髪だけで顔

や体つきは大和にかなり似ている。

「そして俺が松山高校軽音学部部長、赤坂和馬だ！パートはギターをやっている！」

まあ、この人は有名だからな。知っている。

「どうしてまた僕なんかを？」

「それは俺が君の演奏を路上でたまたま聴いたときに気に入ったからだ。覚えてないか？一ヶ月くらい前のことなんだが…。」

よくよく思い出すとグラスンをかけた男が「ブラボー」と言った気がする…。

「とりあえず俺たちの演奏を聴いてみないか？」

「あ、はい！」

彼らの演奏は本当に凄かった。きっかりとあつたりズム。赤坂さんのレベルの高いギター。本当に高校の軽音部なのかと疑った。演奏が終わると僕はただ呟いてた。

「凄い…。」

「おい！どうだったか？」

「凄いです…。本当に凄いです！」

「そうか！満足してくれたか！では早速入部してくれないか？」

「すみません…。そのことは少し考えさせてもらえませんか？」

いきなりだったし今は音楽をしているのが辛かったからだ。

「そうか…。仕方ないな…。だが俺たちは何時でも待つて居るぞ。」

（帰り道）

「音楽、か…。」

実際、赤坂さんに誘われた時は嬉しかった。だけどどうしてもやる気が起きない。無気力になりボーツとしながら歩いていると話しかけられた。

「お、絹谷じゃん！」

「あ、草薙さん。」

「どうしたの？ 間抜けな顔して。」

「いや、別に。」

「ふーん。まっ、絹谷に悩みなんかあるわけないか！」

「酷い言いようですね…。」

「あ、さっきその商店街でうちの学校の子が路上ライブやってたわよ。なかなか上手だったし聴いて来たら？」

確かあそこの商店街は…。

「すいません！失礼します！」

「あ、ちよつと！」

草薙さんの言葉も聞かずに僕は走り出した。

「ハアハア。確かこの角を曲がったところに…。」

期待した。とにかく走った。何故かは分からなかったけど行かないと行けない気がした。角を曲がる。そこに彼女はいた。

「続く」

## 第十四話 仲直り（前書き）

みなさま、おはようございます。最近更新早いですが学校のテストがあるので今月はこれが最後の投稿になると思います。では皆さん12月にまた会いましょう！

## 第十四話 仲直り

（唯視点）

「ごめんね、ギー太。今日もこの子と行ってくるね。」

私は愛用のギターに言葉を掛け先生から借りたアコギを手にとる。

「憂々？行ってくるね。」

「今日もいつもどおり？」

「うん。晩御飯までには戻るよ。」

「お姉ちゃん、行つてらっしゃい。」

「行つてきます。」

歩いて十五分もかからない場所にある商店街。初めて絹谷くんとあつたその場所に今日も私は向かった。

（商店街）

「絹谷くん今日も来なかったなあ…。」

ここで路上ライブを初めてから二週間ぐらい。絹谷くんとあつた初めて会ったのは確か6時から7時の間だった。私はみんなより少し早く部活を切り上げてここにいる。りっちゃんも遷ちゃんもムギちゃんもあずにゃんも私が何故早く帰るかは深く聞かなかった。多分みんな分かってくれてたんだと思う。

「そろそろ帰ろっかな…。」

空も少し暗くなってきた。そういえば今日は誰か知らないけど高校の先輩が聴いてくれてたな…。

（あと一曲にしよう。）

そう思い私は静かに曲を引き始めた。初めて会った時に絹谷くんが引いていた曲を…。

「平沢…さん？」

私は声がするほうを見た。そこには絹谷くんが立っていた。

「あの、平沢さん…。何でここに？」

私は言葉が出なかった。そして悲しい訳でもないのに涙が出てきた。

「絹谷くん！ごめんね！ごめんね！」

そう言っただけながら彼に抱きついてしまった。後で思い出したら自分でもとつても恥ずかしくなるだろう。

「ちょ！？平沢さん！？」

「わ、私のせいで、絹谷くんに凄い不甲斐な思いさせたのに…。あ、あのとき謝れなくて、だから、謝りたくて、ずっとこの場所で絹谷くん来るって思ってた…。」

「平沢さん…。ごめん…。」

「な、何で絹谷くんが謝るの?」

「僕は、平沢さんに会うのが気まずくてずっと音楽から目を背けてた。平沢さんは僕のためにここまでしてくれたのにさ…。」

「絹谷くん…。」

「あ、あとさ…。そろそろ離れてくれないかな? 恥ずかしいんだけど…。」

「ご、ごめん!」

「いや、大丈夫。遊園地の件さ、もう気にしてないよ。」

「本当に!?」

「うん。」

「じゃあね。仲直りのために明日一緒にここでライブ出来ないかな…?」

「二人で?」

「うん。」

「わかった。」

「じゃあ…。」

「ん？」

「指切りだよ。」

「わかった。」

「じゃあ行くよ。ゆーびーきーりーげんまん…。」

「うそーついたらー。」

「はーりせんぼんのーます。」

「「指切った！」」

「約束だね！」

「うん。じゃあそろそろ遅いし帰ろっか。」

「うん。」

そう言った私は彼の手を取って歩き出した。

く直哉視点・帰り道く

「んでね、沢山の人が聴いてくれたんだよ！」

平沢さんはさっきから嬉しそうに話している。そういえば今日は彼女に抱きつかれたり手を握られたりなかなかハプニングだな。

「そついえば絹谷くんはバンド組んでないの？」

「まだ組んでないよ。でも今日で組んで見ようって思った。」

「そつか！お互い頑張ろうね！」

「お姉ちゃん！」

「あ、憂！」

「あ、絹谷さん。今日はお姉ちゃんと一緒ですか？そろそろかなってお姉ちゃんの迎えに行っただんですけど。」

そついった憂ちゃんは凄い笑顔だった。

「じゃあ今日から絹谷さんのことお兄ちゃんって呼ばせて…。」

「ちょっと話が飛びすぎじゃないかな！？」

「？」

憂ちゃんは何を言っているのだろうか？平沢さんは首を傾げているし…。

「あ、僕はこの角左だから。」

「私たちはまっすぐだよ。」

「じゃあね。」

「うん。また明日ね。約束だよ。バイバイ。」

「さようなら、絹谷さん！」

彼女達と別れ僕は帰路についた。

〔商店街〕

翌日の夕方、僕はアコギを背負って商店街に向かった。平沢さんとの約束だからだ。

「あ、平沢さん。待った？」

「ううん！今来たところだよ。」

「うん。じゃあ行くよ。僕の歌引けたよね？」

「うん！」

「よし！ワン！ツー！スリー！フォー！」

〔松山高校〕

「あの、赤坂さん！」

「おお、絹谷じゃないか。決めてくれたのか？」

「はい、あのこれお願いします。」

そういった僕は赤坂さんに入部届けの入った封筒を渡す。もう迷いはなかった。

「よし、確かに受け取った！ようこそ、松山高校軽音部へ。」

こうして僕の新しい音楽が始まった。

く続くく

## 第十五話 初メール（前書き）

今回はとても短いです。

## 第十五話 初メール

〔松山高校〕

（腹、減ったな…。）

そんな平日の四時間目。後少しで昼飯である。そんなことを考えていたらいきなり携帯のバイブになる。

（ヤバッ！？）

急いで携帯のバイブを止める。運良く誰にもバレていない。一番後ろで良かったと思う。

（誰だろ？）

いつもの音楽サイトのお知らせメールかと思って見てみたら知らないアドレスだった。

sub：こんにちは（＾・＾）／

本文

フフフ、絹谷くん。私は誰でしょう（笑）

あーこのメール平沢さんだわ。間違いない。

s u b : こんにちは

本文

平沢さんでしょ？

送信。何故平沢さんが分かったかって？だってアドレスにアルファベットでギー太って書いてあったし。

あ、返事きた。

本文

な、何で分かったのかな！？

あ、慌てる。

本文

だってアドレスにギー太って書いてあったし。

送信つと。

まあしかし授業中携帯使っても意外とバレないもんだな…。

本文

さすがだね、絹谷くん！

憂にアドレス聞いたんだけど迷惑だったかな？

全く迷惑じゃない。むしろ嬉しいぐらいである。憂ちゃん、さすがだな…。

本文

大丈夫だよ。

昨日はお疲れさま。

こんなもんかな？

本文

お疲れさま！

また一緒にライブ出来るかな？

また一緒にできたら楽しいだろうな。

本文

うん。また一緒にしよう。

ストレート過ぎたかな？

本文

本当に！？

絶対だよ！

あ、授業終わっちゃうからバイバイ！またメールするね！

あ、こっちも授業終わるな。しかし女の子にまたメールするねって  
言われるの気持ちいいね！

本文

約束するよ。  
またね。

あ、チャイム鳴った。

「絹谷…。食堂行くぞ。」

「あ、武蔵。分かった。」

「食堂」

「直哉、授業中何携帯見ながらニヤニヤしてた？」

「ヤバッ。見られてた？」

「な、何でもない！」

「何だ、彼女か…？」

「だから違っ…。」

「直哉、武蔵隣いっすか？」

「あ、大和。座れよ。」

「ありがとう、直哉！」

フツ。よくやった大和。よく話をはぐらかしてくれた。褒めて使わす。

「あ、大和。こいつ授業中にニヤニヤしながら彼女とメールしてやがった…。」

「え？マジっスか？誰々！？」

（くそっ！お前もか！）

「あ、用事を思い出した！先に帰る！」

「「あ…。」」

僕はすかさず逃げ出した。後で問いただされ説得に時間をかけたのは言っまでもない。

（続く）

## 第十五話 初メール（後書き）

どーも紅茶花伝です。

テスト前でヤバい状態ですが11月27日が「けいおん！」の主人公でありこの小説のヒロインである平沢唯の誕生日だから投稿させて頂きました。つまりこの後書き書きたかっただけです（笑）  
とりあえず

H a p p y   B i r t h d a y   Y u i ! !

## 第十六話 ギー太の兄弟！（前書き）

今日は暇だから投稿します。

## 第十六話 ギー太の兄弟！

〔松山高校軽音部部室〕

ついにテストが終わった。今日からやっと部活である。しかしなんも準備をしてないな…。

「直哉。ギターは買ったのか？」

「あ、和馬さん。まだ買ってないんです。」

「じゃあ今から行くか？」

「わかりました！」

まあ実際今日買いに行くつもりだったんだけどね。

〔楽器屋〕

とりあえず貯金していた全財産である十万円を引き出してきた。半年間バイトして貯めた資金である。

「おい、直哉、こんなのはどうだ？」

「「ブフツ！」」

僕と和馬さん以外の全員が吹き出した。

そのギターの色はショッキングピンクだった。

「さ、さすがにそれはちょっと…。」

「そうか…。」

凄く残念そうにギターを戻す和馬さん。

「クククツ…。ショッキングピンク…。」

雅さん…。いつまで笑ってるんですか…。

しかも大和なんか知らない高校の女子高生に外で絡まれてるし…。

（他になんかないかな…。）

そう思いながらしばらくギターを見てると僕はあるギターに目を引かれた。

ギブソン、ヘリテージ・チェリー・サンバースト。

「いいなこれ…。」

色もいいかし形もいい。第一印象は最高だったが…。

「二十万…。」

高い。高すぎる。

「それはさすがに…、高いな…。」

「少しぐらいなら部費から出してもいいんだけど、直哉が十万を払ったとしてもさすがに部費じゃ残り十万は無理だね…。」

「ですね…。」

「あ、絹谷くん！」

声のするほうを見ると桜ヶ丘高校の軽音部の皆さんがいた。平沢さん以外とは少し気まずい。

「……。」「」

何を話したら　いいかわからなかった。その静寂を破ったのは田井中さんだった。

「あの、この前はごめん。早とちりをしてさ……。」「」

田井中さんが謝ると他が続く。

「すまなかった……。」「」

「早とちりして申し訳ありませんでした……。」「」

「ごめんなさい……。」「」

「あ、いや。気にしてないし……。」「」

「直哉……。お前何したん……。だ……。？」「」

「何でもないですよ！」「」

「絹谷くんは今日はどうして来たの？」「」

「軽音部の皆さんとギター買いに来たんだよ。」「」

「あの松山高校の！？こんにちは！」

「ん？りっちゃん、漣ちゃん、この人たち知ってるの？」

「松山つていったら凄い上手いことで有名なんだ。」

「そ、そうだったんだ…。」

み、皆さんそんな上手かったんだ…。やっていけんのかな僕…。

「そ、それより絹谷くんはどのギターにするのか決めたのかな？」

「ああ、これが気に入ったんだけどね。」

「あ、ギー太だ！」

そういつて平沢さんは僕が気に入っていたギターを手にする。

「ギー太？このギブソンが？」

「うん！ほら！」

そういつた平沢さんはケースからギターを取り出した。確かに同じギブソンである。

「うーん。この子はギー太の兄弟かな…？だったらギー助かな…？」

ギー助か…。また個性的な名前だなあ。

「このギターお勧めだよ！凄くいい音でるんだよ！」

「実は買いたんだけど持ち合わせが足りなくてね…。諦めて他のにしようかなと…」

「あの…。私に値切らせて頂けないですか？」

「そうだね！ムギちゃん値切るの上手いんだよ！私もムギちゃんが値切ったからこのギター買えたんだ！」

「え、でも悪…」

しかし僕がいい終わる前に琴吹さんは店員さんの方に行ってしまった。彼女に値切ることなど本当に出来るのだろうか？そう思いながらみていると

「ヒイイイイイイ！」

凄まじい悲鳴が聞こえた。それと同時に凄まじい速さで店員さんが電卓を打ち始める。

「十二万では…？」

「うーん…。もう一声！」

「ヒイイイイイイ！」

おとしやかにしか見えない琴吹さんの優しそうな声は今、店員さんにとって凄まじい恐怖でしかないのだろう。しばらくすると

「あの、絹谷さん。このぐらいでよろしいでしょうか？」

そういつて琴吹さんは電卓を見せる。最初、二十万円のギターは八万円でまで下がっていた。すげえ…。半額以下かよ…。

「あ、ありがとう！」

「いえいえ。お詫びの印です。」

「でもなんでこんなに安く？」

「あー、この店ムギの会社の系列なんだよね。」

と田井中さん。

「とりあえず本当にありがとう！今度お礼さしてください！」

「いえいえ。」

「よかったね！絹谷くん！私もギター太に兄弟が増えて嬉しいよ！」

「そういえば桜ヶ丘の軽音部ってまだ残ってたんだね。去年で確かメンバーいなくなったから廃部したと思ってたよ。」

と雅さん。

「あ、私が再建しました。漣とムギと唯が入ってくれて去年一年間やって来ました。そのあと梓が入ってくれて…。」

「ああ、君が今の部長なんだ。僕らが一年のころはまだ桜ヶ丘の軽

音部と交流があつてね。」

（（そうだったんだ…。））

「まあ、また交流できたら僕らも嬉しいよ！じゃあ互いに頑張ろうね、桜ヶ丘軽音部部长さん。」

「あ、はい！」

「懐かしいな。あの頃はよかった…。」

なんか和馬さん黄昏てるし…。

「なんか知ってるか？」

「いや…。知らない…。」

「知らないツス。」

まあ和馬さんと雅さんが一年の時だしな。てか大和戻ってたんだ。

「よし、直哉のギターも買ったしじゃあみんな帰るか！」

「そうだね和馬。じゃあね桜ヶ丘軽音部の皆さん。」

「じゃあ。あ、皆さん今日はありがとう。お陰でギター買えました！またお礼します。」

「いや、私たちも仲直り出来てよかったよ。じゃあ皆さん、さようなら。」

「バイバイ、絹谷くん！」

「さようなら。」

（帰り道）

「で、さっきの桜ヶ丘の女の子なんだったのかな？直哉くん…？」

「え？ほら前にクラスの友達と遊園地行った時にいろいろ…」（以下略）

「へえ、そんなことが…。しかしショーボプの子とやけに仲良かったね…？」

「雅さん…。この前こいつメールしながらニヤニヤしてましたよ…」

「

「まじか！？」

「裏切りものがああ！」

怖っ！雅さんキャラ変わってるし…。

「別に深い意味は…。」

「直哉ああ！」

「はいいい！」

「恋の相談は俺にしろよ！」

「だからちがあああうつてええ！」

かなり強く否定したが僕の断末魔は虚しく夕焼けに消えていった。  
く続くく

## 第十六話 ギー太の兄弟！（後書き）

なんか今回は絶叫が多かったですね（笑）  
感想お待ちしております。

## 第十七話 始動！マイブリス（前書き）

こんばんは！紅茶花伝です！そういえば皆さんはPSPの放課後ライブをしていますか？あれ面白いですね。ちなみに私は全曲パーフェクト狙ってます。どうでもいいですね（笑）では本編をどうぞ！

## 第十七話 始動！マイブリス

〔松山高校軽音部部室〕

「お疲れ様でした！」

今日はとてもいい演奏が出来たな。ちなみに和馬さんがリードギターで僕がリズムギター兼ボーカルをしている。

「みんな今から暇か？」

「すいません…。兄弟が腹を空かせているんで…。」

「そういうことッス。お先に失礼します！」

そう言つて速水兄弟は帰つていった。ちなみに速水兄弟は大和と武蔵の他に中二の弟と小四の妹、小三の弟がいるらしい。そして両親が共働きで忙しいため兄弟で家事を分担しているらしい。ちなみに料理は武蔵が作るらしい…。似合わねえ…。

「そうか、仕方ないな…。雅、お前は？」

「ごめんね和馬。俺も外せない用事があつてさ。」

「あの、僕も少し今から…。」

まあ、僕の場合は嘘だ。でもさすがに和馬さんと二人はいろいろな危機を感じる。

「そうか…。だったら仕方ないな…。」

そう言って肩を落とす和馬さん。申し訳ありません。

「パフエが食べたかったんだがな…。」

今なにか和馬さんに似合わないセリフが出たが無視しよう。そうしよう。

＼帰り道＼

「直哉、ちよつといいかな？」

「あ、雅さん。先に帰られたんじゃない？」

「君が来るのを待ってたんだよ。どうせ君も用事なんかなかったと思っただし。」

この人はなんでもお見通しか…。

「あはは。バレましたか？ところで僕にどんな用が？」

「ああ、この事について少し意見を聞きたくてさ。」

そう言っただけ雅さんは一枚の紙を取り出す。

「Next Generation＼高校生バンド募集＼…？」

「そう！是非ともこれに出たいと思ってさ！だけど先に君の意見が聞きたくてさ。まだ和馬にも速水兄弟にも言っていないんだ。」

「そうことは先に和馬さんに言うべきじゃ？」

「和馬は何がなんでも出るって言うしさ。」

あ、納得。

「君とセッション始めてもうすぐ一ヶ月だけどなかなかいまのバンドいい線いってると思うんだよね。」

確かにまだ一ヶ月しか経ってないが自分でも驚くほどすんなり入った。路上ライブと中学生からの練習の賜物だろう。

「そのライブいつですか？」

「ちょうど一ヶ月後。」

「わかりました。僕は出たいです！」

「そっか！じゃあ明日改めて部室でみんなに話すから。じゃね！」

「あ、はい！さようなら。」

ライブか……。楽しみだな！

（松山高校軽音部部室）

「みんな集合！」

「なんだ雅？」

「学祭前にこれに出たいんだけどどうかな？」

「なになに、Next Generation（高校生バンド募集）か…。直哉、お前はと思う？」

「僕は是非とも出たいです。」

「大和と武蔵は？」

「面白そうですね…。」

「いいッスよ。出ましょう。」

「奇遇だな。俺も出たいと思ってたところだ。」

「じゃあ直哉。参加用紙を書いてくれ。」

「あ、はい！」

参加用紙にいろいろ書いていく。所属高校、メンバーの氏名、それぞれのパートなど。

「そういえば僕たちのバンドの名前ってなんですか？」

「ああ、和馬。去年のままでいいよね？」

「先輩方がつけられた名だ。変えるわけにはいかないだろう。」

「じゃあマイブリス、って書いといで。」

マイブリスか。意外とまともな名前だな…。てっきりチェリーボー

イズとかそんな名前かなと…。

「俺は松山チエリーボーイズの方がいいんだがな…。」

「ってうおい！？適当に言ったら当たったよ！」

「和馬、さすがにそれは…。」

「酷すぎるッス…。」

「だな…。」

「まあ、とりあえずこれで行こう！直哉書き終わった？」

「あ、はい。どうぞ。」

「じゃ今からみんなで出しに行こうか。」

「そうだな！」

この日、僕の初めてのライブハウス出場が決まった。その日から僕は和馬さんに毎日しごかれることになる（ギター的な意味で。）

（桜ヶ丘軽音部室室）

「みんなこれに出てみない！？」

「「Next Generation」高校生バンドの募集？」

「えっと、さわちゃん。これどゆこと？」

「これに出るのよ！貴女たちが！」

「え、でもまだ私たちそんなレベルじゃ…。」

「出ようよみんな！楽しそうだよ！」

「うん！唯の言う通りだ！出よう！」

「律、唯、私は反対だ。まだ私たちには早すぎる。」

「そうですよ！澪先輩の言う通りです！もし失敗したら恥を掻くのは私達なんですよ！」

律が言えば澪が反対する。唯が話せば梓が反論する。このまま話が  
続くように思われたが。

「ムギ（ちゃん）（先輩）はどう思う？。」

「私は…、出るべきだと思うわ。」

ムギの一言ですべてが決まった。

「ムギ！？。」

「ほら、私達の目標って武道館じゃない。なのにこんなことで出るのに躊躇している訳にはいかないんじゃないかしら？それに私はね、このライブは私達にとって小さな一歩だと思うの。」

「ムギ…。」

「多数決なら決定だけど、いいか？梓、漣。」

「わかった。確かにムギの言う通りだな。」

「そうですね。ムギ先輩の言う通りですね。」

「それでライブはいつなんですか？」

「一ヶ月後よ。」

「ギリギリだな…。」

「よし！じゃあ今から練習だー！」

「そうだな！」

「「おー！」」

松山高校軽音部と桜ヶ丘高校軽音部。マイブリスとHIT。この二つのバンドはまた交わることになる。そしてこの出来事が直哉と唯の仲をさらに近付けることになる。

（続く）

## 第十七話 始動！マイブリス（後書き）

やっと松山高校のバンド名が決まりました。ちなみにマイブリスとは「至福」という意味です。

かつこつけすぎましたね（笑）

アニメではHTTの初ライブは冬でしたが話の都合でこの季節にさせて頂きました。ちなみに自分のイメージではこの話は6月の終わりぐらいです。梅雨明けぐらいですかね？ライブの話は設定では夏休みになると思いますね。

無駄話をどうもありがとうございました。これからも頑張ろうと思うのでよろしくお願いいたします。

紅茶花伝

## 第十八話 夕暮れの道のり（前書き）

こんばんは紅茶花伝です。テストの山場が終わったので更新早いです。

それでは本編どうぞ。

## 第十八話　夕暮れの道のり

く桜ヶ丘軽音部く

「ふわふわ時間！」

ライブまであと二週間。私たちHITは今日も猛特訓をしています。

「完璧だな！」

「どこがだ！？ドラムが走り過ぎだろ！」

「やっぱ勢いが大切だし。」

「リズム隊はリズムが命だ！」

「あーわかったよ！」

「まあまあ。」

「もっかいやろうよ！」

「よし！」

「いくよ！ワンツ！ツー！スリー！フォー！」

「君を見てるといつもハートDOKI DOKI」

く一時間後く

「ふう。少し休憩するか。」

「そうね。お茶にしましょ。」

「お茶お茶〜。」

「チャッチャチャチャッチャお茶〜。」

「唯先輩！さっきのパート難しいのに弾けるようになってましたね！凄いです！」

「えへへへ。一生懸命練習したからねえ。あずにゃんも相変わらず凄いよ！」

「律もさっきの演奏はなかなかいいリズムキープが出来ていたとおもうぞ。」

「ムギのキーボードもよかったしな！」

「この調子ならいけそうだな。」

私たちが演奏する曲は、ふわふわ時間、わたしの恋はホッチキス、カレーのちライス、ふでペン〜ボールペン〜の四曲。ボーカルは私だ。

「次は何する？」

「ふでペンやりたい！」

「よし！各員配置に着け！」

「了解しました！りっちゃん隊長！」

「よしいくよ！ワンツ！ツー！スリー！」

「ふでぺんFU～FU～」

～さらに一時間後～

「おい！そろそろ下校時刻じゃないか！？」

「ヤバッ！」

「早く帰りましょう！」

「そうだね！」

こうして今日の練習はお開きとなった。

～帰り道～

「あ、私は用事を思い出した。」

「ん？どした唯？」

「今日ギー太の弦を買いに行かなきゃいけないんだっ！」

「ちゃんとメンテしてるみたいですね。」

「いやー。あずにゃんに怒られちゃったからね。みんな先に帰って！」

「そうか。じゃあな唯。」

「唯先輩また明日。」

「また明日ね唯ちゃん。あ、明日はマドレーヌ持ってくるわね。」

「うんみんなまた明日！あ、ムギちゃん楽しみにしてるね！」

私はギターを背負い直しいつもの楽器店に向かった。

「楽器店」

「えーと、ギター弦はつと...。」

私はいつものようにギターの弦を探す。

（そういえばこのツインネックってどうやって弾くんだろ？やっぱ手が四本の人が弾くのかな？）

「あ、平沢さん。」

後ろから絹谷君の声が聞こえた。私はすぐに振り返った。

「松山高校」

「帰るか。」

「お、直哉。今日は練習しないのか？」

「彰、今日はギターのメンテしないといけないから。」

「大変だな。じゃな！」

（楽器店）

いつもの楽器店に着く。とりあえず弦を買わないとな。そう思い店に入ると見覚えのある後ろ姿がある。

「あ、平沢さん。」

「あ、絹谷くん！」

「今日はどうしたの？」

「ギー太の弦を買いにきたんだ。前にギターってメンテするの知らなくてあずにゃんに怒られちゃったし。」

あずにゃん？ ああ中野さんか。てか一年もメンテしなかったんだ…。いいギターなのに…。

「僕もギターの弦を買いにきたんだ。」

「おお！奇遇だね！」

「そういえばさっきツインネック見てたけどどうしたの？まさか欲しいの？」

ツインネックなど値段もとても高い高校生に扱えるものではない。

「これどうやって弾くのかいつも気になって。やっぱり四本腕の人かな？」

笑いそうになるのを堪える。相変わらず平沢さんは天然だな…。まあそれが彼女の魅力の一つだろうが。とりあえず教えてあげようかな。

「ツインネックは一人で別のパートを弾くときに使うんだよ。上と下で音を少し変えてさ。」

「あ、なるほど！一年間の謎がとけたよ！ありがとう絹谷くん！」

「んじゃ弦を買いにいくのか。」

「そうだね！」

（帰り道）

今日は平沢さんと帰ることになった。まあ別に緊張はしない。

「そういえば平沢さんはなんでギブソンにしたの？意外と重いしネックも太いから女の子には弾きにくいんじゃない？」

「可愛い、から！」

「あはは！平沢さんらしいね。」

「もう、笑わないでよ！絹谷くんだってお揃いのギター買っじゃん。」

何でかな？」

「え？まあ平沢さんと同じで一目惚れだよ。」

「お、同じだね！」

そういつて二人で笑う。端から見れば仲がよいように見えるのかもな。

「そういえば私たちライブにでるんだよ。」

「もしかしてこれ？」

そういつて僕は雅さんから貰ったポスターを取り出す。

「そうだよ！これこれ！私たちこれにでるんだなあ！。絹谷くんは見に来てくれる？」

「実は僕たちも出るんだ。」

「そうなの！？一緒だね！お互い頑張ろうよ！」

「そうだね。頑張ろう。」

「うん！あ、ここでさよならだね……。」

少し残念そうな顔をする平沢さん。僕ももう少し話があったかな……。

「またね。」

平沢さんは僕に笑いかけると僕とは反対の道を歩きだした。

「うん。じゃあね！」

似合わないくらい大きな声を出した。少し恥ずかしい。だけど平沢さんはちゃんと答えてくれた。僕に負けなくらい大きな声で。

「またね〜！」

帰り道一人で歩いてふと思った。平沢さんもライブにでるのか…。僕ももつと頑張ろう…。そう決意した。

~~~~~

絹谷くんと別れた私は帰り道を一人で歩く。もう七時を超えたのにまだ空は綺麗な夕焼けだった。

（もう少し絹谷くんと話したかったな…。）

ふとそんなことを考える。絹谷くんと話すのは楽しい。絹谷くんと話していると憂や和ちゃん、りっちゃん、零ちゃん、あずにゃん、ムギちゃんの誰とも違うよくわからない感情が沸き上がる。私は今までこんな感情を感じたことはなかった。まだ私にはこの感情がわからないけど、だけどここの感情が嫌じゃないのは確かだった。

（続く）

## 第十八話 夕暮れの道のり（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

## 第十九話 ライブ！（前書き）

どうもこんばんは。紅茶花伝です。今回は今までに類をみない長さでグダグダかもしれません。すいません。では本編をどうぞ。

## 第十九話 ライブ！

「ライブハウス」

「ついに本番だ。僕はこの一週間、和馬さんにしごかれてきた（ギターの意味で）和馬さんのギターは凄かった。作曲もセンスがあった。作詞はなんとも言えなかったが…。」

「みんな。ついに本番だな！」

「そうだな和馬。」

「俺たちは今日まで必死に練習してきた！誰にも負けん！みんな行くぞ！」

「「ウオオオオ！」」

「みんなテンションが高い。あの武蔵でさえだ。」

「リハーサルが終わって少し時間があるときに平沢さんに会った。」

「おお！絹谷くん！」

「あ、平沢さん！」

「リハーサルは終わったの？」

「一番最初だったよ。平沢さんたちは？」

「次の次。最後だね。」

今回出場するのは五チーム。リハーサルは出場する順番にあるので  
トップバッターが僕たち、ラストが平沢さんのバンドとなる。

「調子は？」

「一生懸命練習したから大丈夫だよ！」

「おーい、唯。って絹谷じゃん。」

「あ、田井中さん。」

「なに？松山高校も出るの？」

「まあそういうことだね。」

「お互い頑張ろう！」

「ああ！」

互いに握手を交わす。この前の遊園地の一件を考えたら考えられないことだな…。

「放課後ティータイムのメンバーの方はリハーサルの準備をお願いしますーす！」

「お、始まるな。行くぞ唯！」

「いこう、りっちゃん！バイバイ絹谷くん！」

軽く手を振り替えしておく。てか平沢さんたちのバンド名放課後デ  
イ・タイムって言うんだな…。

「直哉…。集合だ…。」

「ああ、武蔵。すぐ行く。」

和馬さん、雅さん、武蔵、大和、僕の五人が集まると和馬さんが僕  
たちにＴシャツを配り始めた。黒の生地で前にクローバーが後ろに  
松山高校軽音部と赤い糸で刺繍されている。凄い派手だな…。

「昨日の夜に俺が刺繍した！」

「和馬さんに刺繍が出来たんですね…。」

「武蔵？なんか言ったか？」

「なにも…。」

「まあいい…。各自本番まで少し時間があるから休憩しておけよ。」

~~~~~

「あ、憂と和ちゃんと純ちゃんだ！おーい！」

「あ、お姉ちゃん！」

「唯、お誘いありがとう。」

「先輩、ありがとうございます。」

「うっん。和ちゃんも純ちゃんも来てくれてありがとう。」

「あ、梓ちゃん。」

「憂、純！」

「梓、緊張してるんじゃない？」

「少しね。」

「みんな、もうはじまるぞ。」

「そうだね澪ちゃん。行ってくる！」

「行つてらっしゃい。ちゃんと見ておくからね。」

~~~~~

ギターのチューニングは完璧か…。メンテナンスも一昨日したしな。

「準備出来たかみんな？」

「ああ、和馬いつでも行ける。」

「大丈夫ッス。」

「OKですね…。」

「はい！行きましょう！」

「よし、いくぞ！」

ついに本番だ。

「どうも皆さん。松山高校軽音部のマイブリスです。」

「どうも皆さん。夢でお会いして以来ですね。」

「いきなり気持ち悪いな！」

「ブフツ！」

雅さんが吹き出す。会場からも笑いが起きている。

「おいおい笑わないでくれよ。コントやってんじゃないんだぜ。なあ直哉。」

「なんで和馬さんこっちに話を降るんですかね？どう思いますか雅さん？」

「ちょっと僕に振らないでくれよ直哉くん。はぐらかしたいしそろそろ行くよ。」

「ああ、そうだな。じゃあ聞いてくれ、恋に焦がれてく2009」

「ワン！ツー！スリー！」

しかし凄い曲名だよな…。恥ずかしくなる…。

本当に適当なMCが終わりカウントを始めた雅さん。まあ打ち合わせどおりなだけだ。しかしMCはふざけても演奏はふざけない。

一曲目は完璧だ。ボーカルも問題ない。和馬さんに至っては練習では見たことのないパフォーマンスさえ見せている。

「どうだったかアア!？」

観客席から歓声があがる。

「じゃあ次行ってみよおお！」

似合わない感じだが僕も叫ぶ。二曲、三曲といくうちにだんだんテンションがあがる。武蔵もキーボードのパートがないときは手拍子などで盛り上げていた。大和のベースもかなりいい。和馬さんと雅さんは言うまでもなかった。てかなんで和馬さん上半身裸なんだ？疑問に思っているうちに三曲目が終わる。

「最後は自分が作曲した曲です。バラード調なんで手拍子でお願いします。」

演奏を始めるとみんなが手拍子をしてくれる。そのとき僕はふと和馬さんが言ったことを思いだした。

（いいか、直哉？俺たちはプロじゃない。だから歌詞は自由に書け。聞いてもらう人に自分の思いをぶつける。）

うん。和馬さんらしき台詞だね。そして曲もクライマックスに。

ジャン

終わった。

「みんなありがとうおお！」

拍手が起こった。凄い気持ちよかった。

「楽屋」

「みんなお疲れだった。」

「和馬、なかなか疲れたね…。」

「次は文化祭ツスねえ。」

「ああ…。」

「次のグループの演奏始まりますよ。」

「よし。行くか。」

「その前に服を着てください。」

「ブフツ」

雅さんまた吹き出してる。この人のツボが少しわからない。  
とりあえず次のバンドを見に行くでしょう。

「~~~~~」

「いやあー。絹谷たち凄かったなあ…。」

「ああ。そうだな。」

「でもギターの人（和馬）凄い怖かったです…。」

「そ、そうだな。」

「でも私たちも負けてないわよね？」

「ああ。精一杯やろう！」

（絹谷くん凄かったなあ。私もあんな演奏できるかなあ？）

「唯？どした？」

「な、なんでもないよ。頑張ろ！」

~~~~~

「次で最後ですね。」

「そうだな。」

二つ目のバンドは普通だった。よくもなく悪くもなく。

三つ目は酷かった。ベースもギターもメチャクチャで唯一のボーカルの女の人の歌唱力で持つてる感じだった。

四つ目のバンドはギターとドラムとベースのバンド。オリジナルはなかったがなかなか旨かったな。

「直哉。飲み物取りに楽屋いくぞ。」

「あ、はい！」

〈楽屋〉

「まずったな…。」

「大丈夫唯ちゃん？」

「うん…。ごめんね…。」

「まさか唯がここまで緊張するとはな…。」

私が緊張しているのは失敗したらどうしようかという恐れからだ。  
もしかしたら無意識のうちに絹谷くんと自分を比べてしまったのか  
もしれない。

「ヤバイな。あと五分で始まるぞ…。」

「唯抜きでやるしか…。」

「駄目です！五人一緒じゃないなら辞退したほうがマシです！」

ガチャ。

「あ、みんなどうしたの？」

絹谷くんともう一人のギターの人が入ってきた。

「いや、唯が緊張しちゃってさ…」

~~~~~

「いや、唯が緊張しちゃってさ、出れそうにないんだ。」

あの平沢さんが緊張か…。

「律！あと一分しかないぞ！」

「おい、直哉。でる…」

「和馬さん！ツインギターで出ましょう！」

反射的に言った。後悔はしていない。

「お、おお。まあそのつもりだったが。」

よし。

「平沢さん。五分ぐらいなら時間を稼げるからその間に落ち着ける？」

コクン

平沢さんは小さく頷く。

「おい直哉。ギー助だ。」

「ありがとうございます！」

「よし、行くぞ！」

「はい！」

てか彼女が僕のギターにギー助って名付けたの和馬さん覚えてたんだな…。

くステージく

「皆さんこんにちはー！」

「さっきお会いして以来ですね。」

やっぱり観客はみんなざわざわしているか。

「放課後ティータイムの皆さんの準備が少し遅れているので少し僕たちの歌を聞いてください！」

「女の子の準備は待つてやるものだしな！よし行くぞ！ハヤシライスの唄！」

このハヤシライスの唄は名前はふざけているがかなりレベルが高い。ちなみに和馬さんにしごかれている（ギターの的な意味で）時の夕食がハヤシライスのときに和馬さんがネタで作曲したものだ。リズムギターとリードギターのパートしか作ってなく実質僕たち二人だけの歌だ。まさかここで役にたつとはな…。

く楽屋く

「大丈夫唯ちゃん？」

「うん、もう大丈夫だよ。ありがとうムギちゃん。」

「唯、確かに絹谷たちは凄い。」

「うん。」

「でも私たちも負けてないわ!」

「そうだ! 私たちも負けてない!」

「ごめんね。りっちゃん、漣ちゃん、ムギちゃん、あずにゃん。そ  
うだね!」

「唯、行けるか?」

「うん。」

「私たちの演奏見せてやろうぜ!」

「「おー!」!」

「ステージ」

「こんにちは皆さん放課後ティータイムです! さっきはお待たせし  
て申し訳ありませんでした。けどもう大丈夫です! 私たちの演奏  
を聞いてください! それではいきます。ふわふわ時間!」

「ワン! ツー! スリー!」

「君を見てるといつもハートDO KI DO KI」

一曲目、二曲目、三曲目が終わっていく。ここまでみんなミスはない。大丈夫。最後までいける。

「最後になりました。聞いてください。ふでペン〜ボールペン〜!」

「ふでペンFU FU ふるえるFU FU…」

無我夢中で歌った。放課後ティータイムのみんなのために、何より絹谷くんのために。

「ここまでできたから かなり本気よ」

終わった。そう思った瞬間拍手が起こる。

「「ありがとう!」」

みんな観客席に向かって手を振る。

（絹谷くんは…、いた!）

絹谷くんを見つけてさっきより大きく手を振った。お礼の意味も込めて。絹谷くんも返してくれた。

（私、頑張ったよ!）

〜ライブ終了後〜

平沢さん達いい演奏だったな。決して誰かが飛び抜けて上手いわけでもなくみんなが特別に上手いわけでもないのにあんなに心が引き寄せられるのは彼女達が本当に楽しんで弾いていたからだろう。

「うわっ！何だこの人達！？」

「私たちファンになっちゃいました！」

女の子達から声をかけられる。てか絶対みんなに言ってるだろ…。

「ちょ、止めて欲しいッス！」

僕たちは男の人たちからの声が多かったが大和だけ女の子ばっかだ。死ねばいいのに。

「双子なのに複雑な気分だ…。」

「お前ら顔はそっくりなのにな。」

武蔵と愚痴つてると声を掛けられた。

「お、絹谷じゃん！」

「あ、草薙さん！どうして？」

「桜ヶ丘の子が出てたからね。絹谷たちのステージかつこよかったよ！」

「ありがとうございます。」

「うん！じゃまたね。」

そういつて草薙さんは一緒に来ていた友達と帰っていった。

「知り合いか…？」

「まあね。」

「二股か…？」

「違う！二股でも一股（？）でもない！」

「冗談だ…。ムキになるな…。」

「くっ！謀ったな武蔵。」

「ククク、ほら、本命が来たぞ…。」

「だから、本命ってなんだよ！」

「絹谷くん？」

「あ、平沢さん…。」

「じゃあな…。俺は先に向こうに行っておく…。」

~~~~~

「あの…。さつきはありがとう。絹谷くんのお陰で助かりました。」

「いや、僕はなにもしてないよ。」

「でも、私助けてもらっちゃったし…。」

「ほら、ギター値切ってもらったからこれでおあいこって、それは

さすがに安上がりか。」

「今度お礼させてくれない…かな？」

「え、でも悪い…。」

「お願いします。」

「じゃあ楽しみにしておくよ。」

「本当？」

「うん。」

「おーい唯帰るぞ！」

「あ、りっちゃん！今いくよ！じゃあまたね絹谷くん！楽しみにしててね！」

「じゃあね。」

「バイバイ。」

それだけ言うと平沢さんはみんなのところに戻っていった。

「おい！絹谷！帰るぞ！」

「あ、はい！今いきます！」

「なんだまた彼女か？」

「そんなんじゃないですよ。あ、打ち上げ行きましょう!」

「そうだな!行くぞ!」

少し暗くなった帰り道を歩く。今日は本当に楽しかったな。満足感で胸がいっぱいだった。  
く 続くく

## 第二十話 夏休みの暇な日に（前書き）

どうも紅茶花伝です。久々の更新です。では本編をどうぞ！

## 第二十話 夏休みの暇な日に

（絹谷家）

（暇だ…。）

それだけを考えていた今日この頃。夏休みに入り部活以外ではあまり外に出ない日々。しかも今日は部活が休みなのでなにもすることがない。

（久しぶりに路上ライブでもするか…？）

しかし時間はまだ昼の二時ごろ。かなり暑い。はっきり言うと冷房の効いた部屋から出たくなかった。

（やっぱりやめとくかな…？）

その時携帯がなった。

（ん？誰だ？）

どうせ武蔵や彰あたりだろうと思いメールを確認してみる。

From: 草薙

本文

今、暇？

暇だったらちょっと出てきなさい。

（草薙さんか…。）

少し迷っていたら電話が掛かってきた。

「はい、もしもし。」

「あ、絹谷？今商店街いるからすぐに来なさい。」

「はい！？」

「わかった？じゃあね。」

ブツッ プープープ…

「なんという身勝手な…。」

多少面倒だが行くとするか…。急いで準備をする。  
しかし本当に急だな。

〈商店街〉

「おーい！こっちこっち！遅いぞ！」

「草薙さん…。メールしてから三十分ですよ…。せめて褒めてください…。」

「はいはい。ほらいくよ。」

「どこに？」

「新しく出来たショッピングモール。」

最近出来たショッピングモールはかなりの規模で一回は言ってみた  
いかなみたいには思っていた。

「そんな急に…。」

「駄目…?」

クツ！何で涙目なんだ！断れないじゃないか！

「わ、わかりました…。」

「そうと決まったら行くよ！ほら！早く！」

「嘘泣きだったんですか!?!」

「当たり前じゃない。絹谷ってば騙されやすいねー。」

「酷…。」

勢いで僕は草薙さんとショッピングモールに行くことになってしま  
った…。

くショッピングモールく

「ねえこの服どう?」

「えーと。似合ってますよ。」

「じゃあこっちは?」

「良いんじゃないですか？」

「絹谷適当に言ってない？怒るよ？」

「て、適当じゃないですよ！」

「ふーん。じゃあ絹谷が選んでみて。」

「はい？」

「冗談よ冗談。」

（この人…。）

「お子ちゃまな絹谷くんにはまだ女の子の服なんか選べませんもんね。」

「草薙さん、酷すぎじゃないすか…？」

「あははは。ごめん、ごめん。じゃあちよつと待ってて。」

「あ、はい。」

そついうと草薙さんは一時間悩んだあげくに最初に選んだ服を買いにいった。

「何で女の子ってこんなに服に時間かかるのかな…。」

「絹谷お待たせ。じゃあ次行くよ。」

「次はどこに？」

「ランジェリーショップ。」

「ランジェリーショップ？」

「知らないの？」

「すみません。」

「大丈夫よ。きっと絹谷も気に入るから。」

ランジェリーショップとはなんなのだろうか？まあ僕も気に入ると草薙さんも言ってるし大丈夫だろう。笑顔怖いけど。

「ランジェリーショップ」

「あゝ、草薙さん、ここは？」

「ランジェリーショップ。」

「ら、ランジェリーショップって女性の下着の専門店のことだったんですか！？」

中学校では女子と関わりなんかまったくなくしかも高校は男子校である。知ってるはずがない。

「ほら、サッサ行く。」

「え？ちよ、ちよつと草薙さん！？」

こうして僕は人生初のランジェリーショップ入場を果たした。

〈店内〉

「心頭滅却、煩惱退散…」

「ねえ、絹谷？これどう？」

草薙さんが手に持って見せてきたものはピンク色のフリフリしたブラ…とパン…だった。

「く、草薙さん！？何て言うものを見せるんですか！？」

「似合うと思う？」

「知りませんよ！」

「あら残念。好みじゃなかった？」

「そうじゃなくて…」

「絹谷は私の下着姿みたい？」

いきなり僕の背中に胸を押し付けてくる草薙さん。くそッ！デカいッ！

「く、く、く、草薙さん！？」

「いいよ、絹谷になら…。」

耳元で囁かれる。限界だ…。

「やっぱり外で待ってます!」

きぬたにはにげだした。うまくにげれた。

僕が外に出てから十五分くらいしてから草薙さんは店から出てきた。

「絹谷なに逃げだしてるのよ!」

「仕方ないじゃないですか…。」

だって僕思春期真っ只中の高校生だし…。

「まあ帰らなかったただけ許してあげるわ。」

「どうも。」

「そうだ!クレープ食べましょう。ここの美味しいのよ。」

僕の手を握って駆け出す草薙さん。そういえば女性に手を握られたのは平沢さん以来か…。あのときは何であんなにドキドキしたんだろうか…?

(何考えてるんだか…。)

「ねえ、絹谷何にする?」

考えているうちにクレープ屋についたらしい。

「じゃあ僕はレタスとシーチキンで…。」

「私は…、チョコとイチゴにするわ。」

「あ、僕が出しますよ。」

「え?さすがに悪いわよ。」

「別に構いませんよ。」

「じゃあ…。ありがと。」

「お待たせしました。八百円になります。」

ベンチに座りクレープを食べる。

「ねえ、それ美味しい?」

「美味しいですよ。」

「頂き!」

あ、僕のクレープかじりやがった。

「うん、意外にいけるはね…。」

「ですね。」

クレープを食べ終わり一息つく。

「そろそろ帰りましょうか？」

確かにそろそろ帰りたい時間だった。

「はい。」

（公園）

帰る途中に公園に寄った。特に意味はないけどね。

「そういえば絹谷ってどうしてギター始めたの？」

「えっと…、中学生の頃にあるバンドに憧れてですかね？」

「それで今何年やってるの？」

「今年で四年ぐらいですよ。でもなかなか上手くなくて…。」

「あら、私は絹谷の演奏好きよ？」

「ありがとうございます。光栄ですよ。」

「絹谷用事を思い出したわ。ごめんだけど先に帰って貰える？」

「あ、はい。わかりました。」

「今日は楽しかったわ。ありがとう。」

「こちらこそ。じゃまた。」

「じゃあね。」

草薙さんは小さく手を振る。僕も手を振り返しておいた。そういえばベンチの後ろから視線を感じたが気のせいだろう。

（帰るか…。）

夕暮れの道を歩き出す。まあ、今日は楽しかった。そんなことを考えていたら見覚えのある二つの影。

（あ、あれ武蔵じゃないか？隣の二つ結びの小さい女の子は誰だ…？）

（続く）

第二十話 夏休みの暇な日に（後書き）

感想等お待ちしております。

## 第二十一話 ライバル！？（前書き）

どうも紅茶花伝です。今回は更新早いですね。では本編をどうぞ！

## 第二十一話 ライバル！？

く平沢家く

「あつうーいいー。」

「お姉ちゃんかき氷だよ。」

「ああー。ありがとうーういー。おいちく、しみわたるく。」

「今日は本当に暑いね。」

「ね。」

今の時間は三時ごろ。とってもとっても暑い。

「スイカあるよ?」

「食べる!」

「じゃあ切ってくるね。」

「うん。」

しかしとっても暇。五時頃にギー太をもって公園にでも行ってみようかな?

く公園く

「憂ー。行つて来ます!」

「行つてらっしゃい。」

ギー太を持って公園に向かう。時間は四時半頃。まだまだ暑いけど昼に比べるとだいぶ涼しい。

「今日もギー太に歌作ってあげるね。」

公園に向かうのはそのため。公園だと何だかはかどる気がする。

~~~~~

「こんなもんかな？もっちゃつとこのパートにミュート効かせてみようかな？」

作曲を始めてから一週間。大体のリズムは決まった。後は少しリズムをいじつてみて作詞するだけ。

（あ、あの人確かこの前ライブに来てくれた、確か草薙先輩だっけ？その隣は絹谷君…？）

なぜか焦った。何でだろうか？

（こつち来た！か、隠れなきゃ！）

急いでギー太をケースにしまいとつさにベンチの後ろにある茂みに身を隠す。

（やっぱり二人は付き合つてたりするのかな？）

話を聞こうにもなかなか聞こえない。そうこうしているうちに六時ごろになり絹谷くんは先に一人で帰っていった。

「隠れているのはわかってるのよ。出てきなさい。」

バレていたみたいだ。少し恥ずかしい。とりあえず茂みから出て草薙さんの前に行く。

「こ、こんにちは。」

「平沢さんだったの。どうして隠れたりしたの？」

「草薙さんが絹谷くんと一緒のところを見てとっさに…。」

「ふーん。」

「あ、あのお二人は付き合ってるんですか!？」

「うん。」

「え…。やっぱり。」

「冗談よ。今日一緒だったのはたまたま。」

ホッとする自分がいた。それが痛いほどわかる。

「平沢さんは絹谷のことが好きなの？」

「そ、そっという訳じゃ…。」

「私は本気で絹谷のこと好きよ。あなたはどうかなの？」

「わ、私は…。」

思い出す。絹谷くんと最初に出会った路上ライブ、絹谷くんに悪いことをしてしまった遊園地、絹谷くんに会ったために路上ライブをしたこと、絹谷くんに泣きながら謝って抱きついたこと、その帰り道に絹谷くんの手を握ったこと、ライブのときに絹谷くんが助けてくれたこと…。

「わ、私も絹谷くんが好きです！負けません！先輩に負けません！」

「私だって負けないわよ。お互い頑張りましょう。」  
「はい！」

「まあ、私のほうが進んでるけどねー。」

「え？」

「絹谷とデートだってしたし。」

「私だって負けてません。このギター絹谷くんとお揃いです！」

お互い一步も譲らなかった。いや、譲れなかった。

「ふう。まあ、いいわ。負けても恨みつこなしよ。じゃあね平沢さん。」

「はい！さようなら草薙先輩。」

別れる私たち。今日私は自分が恋をしているのを初めて自覚した。

「夜、平沢家」

「憂、一緒に寝ていいかな？」

「どうしたのお姉ちゃん？」

「憂に話しておきたいことがあってね。」

「いいよ。」

「お邪魔します。」

「お姉ちゃん、話って？」

「うん。私ね、好きな人が出来ちゃった…。」

「もしかしてその人直哉さん？」

「うん…。」

「応援するよ。」

「本当に？」

「直哉さんいい人だしね。お姉ちゃんが好きになるのもわかるよ。」

「憂…。」

「あ、でも軽音部の皆さんには隠さないほうがいいと思うよ。」

「うん。明日練習があるからその時話すよ。」

「じゃあそろそろ寝よつか？」

「うん。お休み、憂。」

「お休み、お姉ちゃん。」

「桜ヶ丘軽音部部室」

「ねえ、みんな。相談があるんだ。」

「ん？どした唯？」

「私ね、好きな人が出来ただけど…。」

「「な、何だつて！？」」

「やっぱり絹谷か！？」

「そうなの唯ちゃん！？」

「まさか唯がな…。」

「うん。私は絹谷くんが好きだよ。」

「そんな！駄目ですよ！」

「あずにゃん…。」

「なあ唯。本気なんだな？」

「うん。私は本気だよ。」

「だったら私は何も言わない。」

「律先輩！？軽音部は恋愛禁止のはずです！」

「止めな、梓。軽音部の恋愛禁止は軽い気持ちで私たちのことを不意にするなってことを意味してるんだ。」

「そうだな。それに唯の様子を見る限りお遊びのようには見えない。」

「でも！」

「落ち着いて梓ちゃん。唯ちゃんも悩んでのことなのよ。」

「まー、確かに絹谷は唯にいろいろしてたしなー。」

「みんな…。」

「それでも私は唯先輩が心配で…。」

「ありがとう、あずにゃん…。」

「だ、抱きつかないで下さい…。」

（泣きながら言っても説得力ないな…。）

（唯梓も見納めかしら…。）

「なあー、遷、ムギ。」

「ん？」

「どうしたのりっちゃん？」

「やっぱり唯のやつ絹谷のこと好きだったんだな。」

「ライブのあとに唯のことからかったときは顔真っ赤にして否定したのにな。」

「そうね、あの時の唯ちゃん可愛かったわ。」

「よし！練習するか！」

「そうだな！」

「ええ！」

（続く）

## 第二十一話 ライバル！？（後書き）

くおまけ！

「やっと手にいれた…。」

俺の名前は速水武蔵<sup>はやみねむさし</sup>、松山高校の軽音部でキーボードをやっている。

「まさかあんな小さなレコード屋に売られているとは…。」

今日手にいれたのはジャズが好きな俺が認める数少ない日本のジャズバンドのCD。このバンドは生の演奏しかやりたがらないというこだわりがありCDはほとんど出回っていない。よってファンの間でかなりの高値がついている。

（定額が五万位だから三万なんか安いものか…。）

これはあの店では五千円で売られていた。予約があつたが店主に頼みこんで六倍の値段で譲って貰ったものだ。確かに高いが熱狂的なファンなら出せない額ではない。

「待てえええ！」

「チツ…。もう追ってきたか…。」

きつと俺の前に予約していた奴だろう。

「逃げるか…。」

俺も走り出す。しかし…

「なに！？速い！」

ちつさなツインでは圧倒的な速さで俺との距離を詰める。

「くらええ！」

背中に渾身の（猫）パンチが炸裂する。が、

（あまり痛くないな…。）

まあ所詮は女の子だしな。

「そのCDは私のものです！返して下さい！」

「すでに俺が買った…。」

「私が先に予約していたんです！返して下さい！」

「嫌だ…。諦めるんだな…。」

「そんなあ、そんなあ…。た、楽しみにしてたのに…。」

ちびっこツインは泣き出してしまった。端から見れば俺が悪い。まあ、俺が悪いんだが。

ゴンッ！

「痛つ…。」

「お前なに女の子泣かしてるんだよ…。」

「絹谷！？これには訳が…。」

とりあえず事情を話す。絹谷なら分かってくれるだろう…

「お前が悪いじゃん。」

期待を裏切られたようだ。

「ほら、貸せ。」

「なにを！？」

「中野さん、こいつがこれあげるだってさ。」

「え？」

「お前！？」

「ほら謝れ。」

「くそ…。わかった。それはやるからせめて後で聞かせてくれ…。」

「わかりました…。でもあなたが買ったから貰えません。だけど私が先に聴かせてもらいます！」

「わかった…。」

これでいいだろう…。

「絹谷さんありがとうございました。」

「あ、いや別にいいよ。」

「でもまだ唯先輩とのこと認めたわけじゃないですから!」

「はい?」

「じゃ、さよなら!CDはまた今度返します。」

「わかった…。帰るぞ絹谷…。」

「ああ、わかった。」

しかし疲れたな…。

(俺が悪いから仕方ないか…。)

夏の夕焼けが綺麗だった。気のせいか。  
く終わりく

## 第二十二話 余興！（前書き）

お久しぶりです。

久々のわりにはかなり短いですがご了承ください。  
では本編をどうぞ。

## 第二十二話 余興！

くある日の昼

「なあ、漣。」

「なんだ律？」

「唯のやつなんか最近寂しそうじゃないか？」

そう言いながら夏の昼真っ盛りな道端を歩く二人。午前の練習が終わり唯や梓、ムギと別れ二人で家に帰る途中のことだった。

「そうか？」

「ああ。やっぱり絹谷かな？あの二人夏休みなってから会う回数減ってそうじゃん。」

「あー。」

「それにこの前のライブのこともあるから絹谷には部長としてもお礼がしたい訳ですよ。」

「確かにな……。」

「んで、なにする？」

「そつだな。」

「「思い付かないな。」」

「そんなことより明日夏祭りじゃん！」

「もうそんな時期か。」

「澪は浴衣着てくんの？」

「それ正月のときもいわなかったか？」

「あー。あれはほら澪の勘違い…。」

「律はどうすんだ？」

「ムギも梓も着ていくっていったし私は着ていく。」

「じゃあ私も着ていこうかな…。」

「唯と憂ちゃんも多分浴衣だろ。」

そんな話をしながら早十五分。

「じゃあな澪。」

「またな。」

「明日六時集合だからな！」

「わかってるー！」

漣と律がそんな話をしていた頃…

〔松山高校軽音部部室〕

「「お疲れ様でした！」」

「おい、直哉…。明日どうすんだ…？」

「明日？ああ、たしか夏祭りか。」

「雅さんや和馬さんと一緒にまわるつもりだがどうだ…？」

「そうだなー。じゃあ僕も一緒にさせてもらうか。」

「分かった…。伝えておく…。明日六時に駅に集合な…。」

「あいよ。」

（まあ、楽しみかな？）

その頃唯は…

〔平沢家〕

「ただいま憂〜。」

「お帰りお姉ちゃん。」

「ねー憂。浴衣有ったっけ？」

「うん。ちゃんと準備してあるよ。」

「さすが憂!」

「お姉ちゃん明日はどうするの?」

「軽音部のみんなとまわるよ。あずにゃんも一緒にだし憂もくる? 純ちゃんも呼んだらいいよ!」

「じゃあそうさせてもらおうかな? 和さんは?」

「もう誘ってあるよ。」

「明日が楽しみだね!」

「そうだね!」

それぞれの夏祭りが始まろうとしていた。

く続くく

## 第二十二話 余興！（後書き）

次回は長めの話を書くので許してつかあさい（笑）

**第二十三話 夏祭り！（前編）（前書き）**

あんまし長くないかもしれません。ではを本編どうぞ！

## 第二十三話 夏祭り！（前編）

今日は夏祭りです。八時位から花火が上がり始めるので六時位にみんな集合する予定でした。

～会場～

「憂、和ちゃん、誰が見つけた？」

「うーん。なかなか見つからないね。」

「こつちも。なかなか人が多くてね。」

予定の場所はこの辺のはずですが人が多くてなかなか見つかりません。

「おーい！唯！」

「あ、りっちゃん、澪ちゃん、ムギちゃん！」

「やっと見つけた。結構人が多くてな。」

「あれ、あずにゃん達は？」

「梓ちゃんは純ちゃんと一緒に合流するって言ってたわ。」

「皆さん！遅れてすいません！」

「お、来たな。」

「あ、あの。よろしくお願いします。」

純ちゃんは少し緊張しているようです。

「うし！みんな揃ったし行くか！」

「最初はどこに行くつもりなの？」

「とりあえず何か食べるものを買いに…。」

「あ、焼きそば食べたい…。」

「あ、私皆さんの分買ってきます。」

「一人じゃ大変そうだし私も行こうか？」

「じゃあ純ちゃんと憂ちゃんにお願いしようかしら？」

「じゃあ代金。」

「あ、はい。純ちゃん、行こっか。」

憂と純ちゃんは焼きそばを買いに行きました。

「じゃあ澪と私はたこ焼き買いに行ってくる。」

「分かった。じゃあまたすぐな。」

「みんな行っちゃったし私たちは何を買っ？」

私は残ったみんなに聞きます。

「私かき氷と綿菓子食べてみたかったの。」

「じゃあ買いに行きましょう。」

「そこに二人ともお店がありましたよ。」

「早く行きましょう！」

ムギちゃんはちょっと興奮気味です。

十五分後位に集合場所に決めていた広場にみんな集まりました。

「皆さん、焼きそばどうぞ。」

「お、悪いな。」

（うわゝ。零先輩だあゝ。）

「ん、ありがとう。」

「ありがとう、純ちゃん、憂！」

みんな買ってきたものをそれぞれ分け合います。

「こつという場所で食べる焼きそばって美味しいよね！」

「あー。わかる。」

「この前行ったプールで食べた焼きそば美味しかったよね！」

「梓が真っ黒に焼けてた時のでしょ？」

「純！言わないでよ！」

「あはは、梓が一番合宿ではしゃいでたからなー。」

「律先輩！」

「確かに真っ黒だったなー。」

「梓ちゃん楽しそうだったわー。」

「零先輩にムギ先輩まで！？」

「あずにゃんは真っ黒でも可愛いよー。」

「唯先輩！」

みんなにからかわれるあずにゃんはとっても可愛い。

「りっちゃんたこ焼きちようだい！」

「ほい。唯のかき氷もくれ。」

「はい。」

「ムギ！勝手に私のたこ焼き食べるな！」

「うふふ、ボーツとしてる湊ちゃんが悪いのよ。和ちゃんもどつぞ。」

「ありがとう。だけど湊になんか悪いわね。」

（わ、私のたこ焼きがあ……。）

「あ、あずにゃんたい焼き買ってる。」

「そこに売ってましたよ。」

「ほんとに！？りっちゃん買いに行こう！」

「お、行くか！」

「私も行くわ。」

「じゃあ私も。」

「行こう行こう！」

「唯、走ったら危ないわよ。」

「はぁーい。」

「唯って昔からこんな感じなの？」

「ええ。幼稚園からこんな感じよ。」

「あー。」

「でもそこが唯の可愛いところだけだね。」

「やっぱり昔から天然？」

「ええ。小学校のキャンプでインスタントカレー持ってこないといけないときにカレールー持ってきたり調理実習でたこ焼き作るときにタコ担当の唯がタコ忘れてたこなし焼きになったりしたわ。他にも数えられないわよ。」

「くくっ…。た、たこなし焼き…。」

「ぶぶっ…。」

「でもあの無邪気な笑顔見ると不思議と許せるのよねえ…。」

「あー。わかるかも知れない…。」

「りっちゃん、漣ちゃん、和ちゃん！早く早く！」

「走んなくてもたい焼きは逃げないぞ。」

すぐにたい焼き屋さんにつきました。

「どれにしようかな？やっぱりアンコかな？カスタードにしようかな？」

「私はカレー！」

「じゃあ私はチョコレートで…。」

「私は粒アンにするわ。」

「じゃあカスタードにしよう。」

たい焼きを買ってご機嫌で後ろを振り返ったときに誰かに当たりました。

「わっ、すいません！」

「あ、いや。って平沢さんじゃん。」

「あ、絹谷くん。」

そこにいたのは紛れもなく絹谷くんでした。

「律、漣、和の話」

「ねえ、律、漣。確かこの人…」ヒソヒソ

「ああ、あれが唯の好きな人だ。」

「まさかあの唯に好きな人がねえ…。」

「私たちもびつくりだったよ。」

「なかなかいい雰囲気なんじゃない？」

「そうだな…。」

「私ちょっと松山高校の人と話してくるわ。」

「律！ちょっとまって！」

しかしすでに律は行ってしまった後だった。

「松山高校、律の会話」

「こんにちは！」

「えーと君は確か桜ヶ丘軽音部の部長さんだっけ？」

「ライブ以来だな。」

「覚えていて下さって光栄です。」

「えーと何さんだっけ？」

「あ、田井中です。」

「あの田井中さん。単刀直入に聞くけど直哉と君たちのリードギターの…」

「平沢唯です。」

「そうそう平沢さん。なかなかいい感じじゃない？」

「あ、はい。」

「大和…。雅さんなんか企んでないか…？」

「ああ、そうとしか考えられねえ…。」ヒソヒソ

「とりあえずあの二人、二人つきりにさせてみない？なあ和馬。」

「確かにな。おもしろそうだ。」

「あ、はい。」

（この人達ノリノリだな…。）

「そうと決まれば早速実行しようか！」

「律、漣、和の会話」

「律！勝手に行くな！」

「ごめんごめん。いやあ、唯と絹谷二人つきりにさせようと思ったんだけどさ…。」

「断られたんだろ？どうせ。」

「いや、めっちゃノリノリだった。」

「何でだよ！和はどう思う？」

「漣、声がデカい。」

しかし人の多さから唯と直哉にはバレていない。

「私は実を言うと少し興味があるわ。」

「和まで…。」

「それに唯には頑張って欲しいから。」

「はあ…。」

「じゃ、そうと決まればみんなを呼ぶか。」

「はい？」

「監視だよ監視。絹谷が唯に何するかわかんないしな！」

「お前…。」

「皆さん！集合っていったいどうして？」

「お、きたきた。」

「えーと、いまから唯と絹谷くん…だっけ？二人を律が無理矢理二人きりにするらしいからその監視をみんなにしてもらうらしいわよ。」

「え？え？絹谷って誰ですか？わたしよく状況掴めないんですが。」

「純は黙ってて。」

「それってお姉ちゃんと直哉さんに仲良くなってもらうためにですか？」

「まーね。」

「じゃあ…。」

「じゃ少し行ってくるわ。」

「あ、律先輩！」

律と松山高校軽音部（九割雅さん）の唯と直哉二人きりにして監視（尾行）してみよう作戦が始まろうとしていた。

~~~~~

どうも絹谷です。松山高校の軽音部で夏祭りに来ました。たい焼き食べたくなって少しい焼き屋に寄ったところで平沢さんに会いました。

「わっ、すみません！」

「あ、いや。って平沢さんじゃん。」

「あ、絹谷くん。」

「奇遇だね。」

「そ、そうだね。」

平沢さん、浴衣か…。なかなか似合ってるな…。まあ素材がいいしな…。

「き、絹谷くんもたい焼き買いに来たの？」

「うん。」

「飛ばされてるよ。」

「うん、ってええ！？」

ついてないな…。また後ろからか…。何か列長くなってるし…。

「また並び直しか…。まあいいか。ところです平沢は誰と来たの？」

「部活のみんなと友達と憂達と来たよ。絹谷くんは？」

「松山高校の軽音部で…。あれ？誰もいない？」

「あ、こっちも。りっちゃん達どこいったんだろう？」

まさかあんな話がされてるとはこのとき、夢にも思わなかった。

く続くく

**第二十三話 夏祭り！（前編）（後書き）**

感想等お待ちしております。

## 第二十四話 夏祭り！（後編）（前書き）

どうも紅茶花伝です！

ぶっちゃけ今回の話無理があると思いますが許してください。

しかも昨日は和ちゃんの誕生日だったので更新しようと思ったのに更新しなかったのも許してください。

では本編をどうぞ

## 第二十四話 夏祭り！（後編）

（夏祭り会場）

「皆さんどこに行つたんだろうか…。」

「こつちもないよお。」

何とか並び直してたい焼きを買い、とりあえずみんなを探そうとしたときだった。

「あ、雅さん！どこ行つてたんすか？探しましたよ！」

「あー絹谷ごめん。みんな急用思い出したから平沢さんと回つてくれないかな？（棒読み）」

「はい？」

「そういうことだよ。じゃあね！（棒読み）」

「ちよつと雅さん！？」

行つてしまった…。これはどういうことだろうか…。まさか平沢さんと二人きり…。何て言うか今日は一段と照れるのにさ。ほら浴衣じゃん。シヨートポニーって言っただけ？なかなか似合ってるし…。あ、憂ちゃんと間違えなかったのは胸のおお…。声が微妙に違つたからだよ。

~~~~~

「皆さんどこに行っただろうか…。」

「こっちもないよお。」

私は絹谷くんがたい焼きを買ってる間からりっちゃん達を探していました。

「あ、りっちゃん！それに漑ちゃんも和ちゃんもどこに行ってたの！？」

「あー。ごめん唯。急用ができてさ。絹谷と回ってくれないか？（棒読み）」

「すまないな唯。（少し棒読み）」

「ごめんね唯。また後でね。（極めて演技っぽく）」

「ほえ？」

「「じゃ！」「」

「ちょっとみんな！」

三人は早々に行ってしまいました…。何か隣で絹谷くんもドラムの人に同じようなこと言われてるし…。

「平沢さん？」

「ああ、えっと…。何だっけ？」

「いや、どうする？なんかみんなあんな感じだしさ。」

しかし図々しく絹谷くんと二人で回って良いものなのでしょうか？少し迷います。

「腹、減ったな…。」

「あれ？絹谷くんご飯は？」

「実はまだ食べてないんだよね。」

「じゃあ何か食べようか。」

「そうさせて貰います。」

そのあと絹谷くんはいろいろなものをたくさん買ってきました。焼きそばを三つとたこ焼き四つ、イカ焼きを二つにたい焼きを五つ…。とりあえず二人でベンチに座ります。

「た、沢山食べるね…。」

「あー。みんなからよく言われるけど普通じゃない？」

「さすがに太らないかな？」

「いくら食べても太らない体質なんだよね。」

「あはは、私と一緒にだね。」

「そうなんだ。あ、たこ焼き食べる？」

「食べる！」

「ほら。熱いから気をつけて。」

絹谷くんはたこ焼きを私の口の前に持ってきてくれました。何て言うかぁーんみたいな感じです。

「あ、えつと…。」

「ん？食べないの？」

少しやけになって食べてました。

「お、おいしいです。」

「なー！おいしいよなー！」

「う、うん。」

（しかし雅さん何を企んでるのか…。）

「その頃他のみんなは」

「唯ちゃん少し戸惑ってない？」

「絹谷が馬鹿みたいに食うからじゃないか？」

「あー、絹谷は人間じゃないからな。鉄の胃袋もった何かの怪物だし。」

「初めてみたら戸惑うはずだ…。」

「あのー、律さん。お姉ちゃんどうしてこんなことになったんですか？」

「説明してください律先輩。」

「ほら、あれ、唯を応援してあげよう…みたいな？」

「「うわあ…。」」

「面白がつてるだけじゃないんですか？」

「違う！断じて違う！」

（嘘だな…。）

「純ちゃん、なんだねその顔は？」

「な、何でもありません！」

「あ、二人がベンチに座ったわ！」

「和さんもノリノリですね…。」

「お姉ちゃん大丈夫かなあ…。」

「しかし…。絹谷のやつ憎いな…。和馬さん、どう思いますか…？」

「絹谷！俺は寂しいぞ！」

（（てか何でこの人泣いてんだろ？））

「そういえば大和は…？」

「なんかさっき女子高生の集団に逆ナンされてたから置いてきたぞ。」

「そんなことよりみんな見ろ！絹谷のやつあーんなんかしてやがる！」

「龍崎さんでしたっけ？私なんだか心の中にどす黒い感情が沸いてきそうですよ。ねえ澪ちゃん？」

「ムギ、落ち着け…。」

「あ、立った！」

「とりあえずまだ尾行を続けるとしよう。」

こんなことが行われているなど今の二人は知るよしがなかった。

~~~~~

「ふー。落ち着いた…。」

「よく食べたね…。」

「もう少し食べたかったかな？」

まあこれは本当の事だったりする。実は少し食べたりない。

「次はどこに行く？」

「えっと…。行きたい場所は特にないかな？」

「じゃあ適当にまわろっか？」

「う、うん。」

~~~~~

「き、絹谷くん、ちょっと待って…。人が多くて…。」

「あ、ごめん。ほら。」

「あ、ありがとう。」

（無意識に手を差しのべたけどやって良いことだっけ？まあ平沢さんも気にしてないさ大丈夫か…。しかし…）

（手、差しのべられたから掴んじゃったけど大丈夫かな…。だけど…）

（（恥ずかしいな…。））

（と、とりあえず、絹谷くんと二人きりなんだからもつと楽しもう！）

「あ、絹谷くん！あのぬいぐるみ可愛いね！」

「あの射的のやつ？」

「うん！あ、ちょっと待っててね！」

そういった平沢さんは早速射的をやりだした。まあ結果は…

「あ、当たらない…。」

「当たらないね…。」

すでに五回目。被害総額は二千円に昇っていた。

「僕も一回やってみるよ。」

「うん…。」

平沢さんかなり落ち込んでる…。とりあえずやってみるか…。

「おめでとう！にいちちゃん！彼女さんにプレゼントかい？」

お約束みたいな展開だなんて自分でも思った。それに彼女ではないし…。

「平沢さんどうしたの？」

なんか平沢さん顔真っ赤にしてるな。

「な、何でもないよ！スゴいね絹谷くん！」

「あげるよ。」

「え？」

「平沢さん欲しがってたしさ。」

「何か悪い…。」

「じゃあ、いらないの？」

少し意地悪に聞いてみると…。

「いる！」

「あははは！」

「何で笑うの！？」

だって平沢さん思った通りの反応するんだもん。

「何でもないよ。」

「うー。しどいよ絹谷くん！」

「ごめんごめん。ほら。」

「あ、ありがとう。」

しかし本当に嬉しそうに受けとるなあ…。そういえばそろそろ…。

「花火って何時からだっけ？」

「えっと…。たしかそろそろのはず…。」

「んじゃこつち行こう。」

「ほえ？絹谷くんちょっと待ってよー！」

「尾行の最前列」

「いやー、お二人ともろけてますなあ。」

「そうね。」

「絹谷の野郎…。」

「梓、落ち着け。」

「ちびっこが黒いな…。」

「ちびっこ言わないでください！私のCD横取りしたくせに偉そうです…！」

「ちゃんと貸してやっただろう…。俺はまだ聴いてないのにな…。」

「それぐらい当たり前です！あと一ヶ月は借りるつもりです！」

「頼むからそろそろ返してくれないか…？」

「駄目です…！」

「ねえ、憂。この二人はなんでこんなに仲いいの？」

「わ、分かんない。」

「あれ？唯と絹谷くんはどこかしら？」

「まさか見失ったのか！？」

（龍崎さんうるさいな…。）

「何やってるんですか律先輩！」

「梓と速水さんが喧嘩してるの見いってたら逃がしちゃった。」

「うつ…。」

「すまない…。」

「ほら、そろそろ花火始まるぞ。唯は絹谷くんがいるから大丈夫だろ。」

「だな！ほら雅、武蔵！大和を探しにいくぞ！」

「わかったよ和馬。」

（唯…。頑張つてね。）

こうして唯と直哉への尾行は終わったのであった。

~~~~~

「絹谷くん、疲れたよお…。」

「ほらもう少しだから。」

絹谷くんについていつてからすでに十分あまりがたちます。私と絹谷くんは少し小高い丘の上にある小さな神社を目指して決して短くはない階段を登っていました。

「ハアハア……。」「

「ほら平沢さん、着いたよ。」

「うわぁー、すごい眺め……。」「

この景色に感動していたら  
ヒュウウ　ドン！

「あ、花火！」「

「ここ人いないしよく見える穴場なんだよ。今年は来るつもりなかったけどね。」「

そう言って笑う絹谷くんはどうして私を連れて来たんでしょうか？疑問に思いながらも今はこの景色と花火を楽しもうと思います。

今年の夏祭りは私にとって忘れられないものになるでしょう。

く続くく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6958o/>

---

K - ON！～ふわふわ日和～

2011年1月10日13時10分発行